
大番長～白き狼と紅き龍～

世紀末敗者寸前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大番長～白き狼と紅き龍～

【NZコード】

N7332M

【作者名】

世紀末敗者寸前

【あらすじ】

200X年…

突如として日本の中に開いた大穴

通称「魔界孔」

その出現に伴い発生した天変地異により大地はネジ曲がり、海は別れ、日本は列島の姿を失つてしまつた

その最中、人に不思議な力が宿る傾向が生まれた
その原因ともされるBストーン

特殊な力を使えるものを皆は特待生と呼び、畏怖した
力こそが正義とされつつあつた世の中で二人の特待生が関わること
によつて更なる混乱が生まれることとなつた

聖城学園に転入してきた斬真狼牙、そして土御門琥珀…
彼等の行動が今、日本の今を…未来を動かしていく

プロローグ（前書き）

皆さん知っている方も多いと思いますが、このゲームの一次小説があまり見当たらないので書いてみよつと思つたのですが…

こちらの小説も更新不定期です

尚且つ内容はワンパターンとも思えるチート主人公です
其れが気に入らないという方は閲覧を控えることをお勧めいたします

プロローグ

ザアアアアアアア…

その日は少し強めの雨が降っていた
もう梅雨の季節なのかもしれないな…

そんなことを思いながら琥珀はこれから通うことになる聖城学園に向かっている最中であった

今までずっと一人旅をして…

それまでずっと家業の手伝いをしていたため、琥珀にとって初めての学園生活になるのだ

少なからず琥珀は楽しみにしているのだが…

ここ最近の世の中の動きを見る限りでは一般的な学園生活は期待できそうになかった

B能力者が各地で目覚め、それらが非能力者である一般人を傷つけたり、学園同士で争いを起こしていたり…悪い情報しか入ってこないのだ

琥珀は目の前にそう言つた輩がいたら即刻仕置きをしてきたのだが…正直もううんざりしていたのだ

B能力者を見れば見るほど：人間の醜さというものが表だつて出てきているものしかいないのかという印象しか持てなかつた

「…ふう、全く。これから行く学園にも能力者はいるのかね…」

そんなことを考えていると、いつの間にか学園の校門前に着いていた

「……」

さて、ここではどんなことがあるのかね…

？？？「ん、誰だお前は？」

琥珀はふと後ろから声を掛けられたので後ろを見た

「……誰？」

？？？「いや、そう言つたつちこそ誰だ」

「俺は土御門琥珀。今田からこの学園で学ぶことになつた」

？？？「何!? お前も転校生なのか」

「そういう君も?」

「俺の名は斬真狼牙。いざれこの日本を変える漢だぜ……！」

「……は？」

狼牙「おいー何だその反応は…?」

「…斬真つて…もしかして…」

狼牙「ああ? 知つてゐるのか?」

「…狼牙…だけ? 狼牙つて…お兄さん居る?」

狼牙「ああ、居るが…それがどうかしたのか?」

「やつぱりー! 俺にも兄が居たんだけど…その兄が良く俺に斬真豪

つて言う親友が居るつて良く話してくれたんだよ」

狼牙「へえー、そうだったのか…つて『居た』つて…」

「…前に病氣で…」

狼牙「…そうか」

「…氣にしないでね」

狼牙「分かつた」

「…で狼牙はどうして日本を変えようと思つたの?」

狼牙「なら聞くが…琥珀は今の日本をどう思つてる?」

「…正直最悪だね。今の『時世』、力がすべて物を言うようになつて
る。それは確かに自然の摂理においては正しいことなのかもしけな
いけど…俺は納得してないよ」

狼牙「なら、俺と一緒に日本を変えてみねえか?」

「……なら、少し実力を試させてもらつてもいいかな？」

狼牙「いいぜ、俺もお前の実力を知りたかつたんだよ！！！」

互いに拳を構え…

シユツ！！！

拳が一人の顔手前5mmで止まった

二人は一瞬で互いの隙を見つけ…そこを撃とうとした
その攻撃を…一瞬で理解し合つたのだ

狼牙「へつ…お前、強いな」

「そう言つ狼牙こそね よし、気に入ったよ。俺の力、存分に使つ
てくれ」

狼牙「へつ、これからよろしく頼むぜ、琥珀」

「おう！！つて、さつきから気になつてたんだけど…そつちに居る
狼の姿をした女の子は誰？」

狼牙「！！お前、どうして久那岐が女だつて…」

「あ～、俺の一族つて人に見えざる者を見ることが出来る家系でね。
俺はその一族の中で一番力が強いって言われてたんだよ。…で、こ
の姿になつたのつて…もしかして…」

狼牙「ああ、魔界口だ」

「やつぱり…大変だな」

狼牙「へ、解決策はあるんだよ！！だから俺はそのためにも全国制
覇をしなきやならないんだ！！」

「ふふ…といふことは久那岐さんは狼牙の女ってことだね」

狼牙「ああ、大事な幼馴染で…俺の大切な女だ」

「…羨ましいよ、そんな大切な存在が居る狼牙が」

狼牙「お前には居ないのか？」

「うん…今までずっと旅を続けている毎日だったからね」

狼牙「なら、これから作ればいいじゃねえか…！」

「…そうは言つても…俺つて女性と付き合う経験ないし…こんな女の顔の男なんて好きになつてくれる奴いないだろ？」

狼牙「そうか？お前確かに女っぽい顔だけど…男義は俺に負けないくらいに強いじゃねえか…！自分に自信を持て…！…そうすれば自然に女はお前に寄つて来るつて…！」

「…狼牙がそう言つのならそつしてみるよ」

狼牙「おう、じゃあそろそろ行くか…！俺達で…この学園に嵐を起こしてやるぜ…！」

「ああ…！」

狼牙と琥珀は共に学園に向かつた

この一人の登場によつて…この学園

聖城学園は大きく揺れ動くことになつた

短い…

もつ少し長く書きたいけど…

難しいよね

教室に入り、自己紹介をする際、狼牙は当たり前のようになつた全国制覇をするといった

それを聞いた瞬間、クラスの皆が狼牙を白い目で見るよになつた琥珀もまた、狼牙に賛同して共に動くと言つて、やはりそんな顔をされた

それもそのはず、この学園は今は闇崎アギトという特体生に支配をされていて、逆らうものは皆酷い目に会つてこなしが知れ渡つているからである

だから大言を吐いた、琥珀と狼牙には近寄りたくないといつ気持ちで一杯一杯なのだろう。転校生に質問をしに来ないのだ

「…（やれやれ…特体生一人にこんなにおびえて…）とんだ学園だな」

「…貴方達…間違つてもそれは大声でもう言わない方がいいわよ？」

狼牙「ん、あんたは？」

「…私はこのクラスの委員長で日比生咲苗つていうの」

狼牙「へえ、あんたいい女だな」

咲苗「な、いきなり何を言つてるの…？」

「ブツ…くくつ…」

狼牙「あ、どうした？」

「いや…いきなり会つたばかりの女性を口説いてるから…今まで俺はそんな奴と会つたことがないから…それに…その狼牙にあんなに動搖してこる委員長さんの反応も少し面白くて…」

狼牙「はは、俺はこんな奴だからな」

「ハハハ、益々気についたよ、狼牙」

咲苗「と、ともかく…この番長はそういうことはすこく敏感

なのーーだから…」

狼牙「心配いらねえよ」

「やつそう やつき気配を調べた感じだと、この学園には確かに強いB能力者は存在するよつだけど、俺達はその程度の奴らには負けないし」

咲苗「と、とにかく忠告だけはしたからね」

そう言つと咲苗は一人の傍を離れて行つた

「やれやれ…この学園の生徒は心の底までその番長とやらに漫食されているのかね」

狼牙「はつ、関係ねえよ」

「ふふふ…」

「??」「おい」

「ん?」

「??」「お前じやねえ、斬真狼牙」

狼牙「あ、俺に何か用か?」

「??」「俺は陣内兵太つて言つんだ」

狼牙「ん、その陣内が何か用か?」

兵太「これだけは言つておく。委員長には手を出すな」

狼牙「はつ? あれはお前の女なのか?」

兵太「ちつ、違うが…」

狼牙「なら別にいいだろ。俺が委員長を口説いたつて」

兵太「い、いいから…! 委員長には手を出すな…いいな…!」

そう言い残し…兵太も一人の傍を離れて行つた

「…ふふふ、彼は見所があるね」

狼牙「そうか?」

「これでも人を見る目はある方だと思うけど?」

狼牙「…まあいいや。とりあえず、何から始めるか決めねえとな」

ガラツ!!

狼牙と琥珀がこれからの方針を話し合おうとした時…

執行部「田比生咲苗はいるか!!」

咲苗「は、はい…何か、用ですか?」

執行部「番長様がお呼びだ!!一緒に来てもらおうか!!」

狼牙「…何だ?」

「…やつさの話から推測すると…多分、番長が気にいった女生徒を執行部の部室まで呼び出して…性的なことでも強要させるんじゃないのかな?」

狼牙「…成程な」

「予測だから、確認してみる必要があるね」

琥珀が遠巻きに見ていた一人の女生徒に話を聞くと…

琥珀の推測は完璧といえるほど当たっていた

そして…もし、この呼び出しを拒否した場合、クラス全体が危うくなるかもしれないということも分かつた

咲苗「わ、分かりました」

執行部「よし、なら…」

兵太「行く必要ないぜ…委員長…!!」

執行部「何だ貴様は」

兵太「陣内兵太だ!!委員長は行かせないぜ…!!」

執行部「ふんつ…!!」

バキッ

兵太「ぐあ……」

兵太は一撃で崩れ落ちた

狼牙「……弱」

「……」

執行部「ふん……無駄な時間を……」

兵太「まだ……まだだ……」

執行部「ふん……なら、今度は手加減せん」

兵太「クツ……（俺は……ここまでの中男なのか……）」

狼牙「おつと……選手交代だ」

兵太「ざ、斬真狼牙」

狼牙「へつ、熱いやつだなお前は……下がつてろ」

兵太「で、でも……」

「いいから、下がつてな」

兵太「つ、土御門琥珀」

「琥珀でいいよ。長いし……と、陣内はさつさと後ろにいな

兵太を後ろへと移動させ、二人は執行部員と向き合った

執行部「何だ、貴様らは。見覚えのない顔だな」

狼牙「へ、今日転校してきた斬真狼牙だ」

「同じく土御門琥珀。まあよろしく……と言つても君は忘れることのできない名前になると思うけどね」

執行部「はつ、生意気な……！」

狼牙「琥珀……こいつは俺一人でやる」

「はいはい……」

狼牙「ふつ！」

執行部 なッ！？

ノキッノキッノキッ！！！！

デルシード

兵太「す、すげえ！ワンパンで決めちまつた」

咲苗 いしえ 3発よ

卷之六

送苗「本當だ

狼牙「へへ…」んなもんじゃないぜ？」

ガヤガヤガヤガヤ

執行部員を倒した後、教室にいた生徒達がざわめき始めた

男子 おー! これはヤバいんじゃないしか?」

女子 輸行部員を倒したがために、

野子「ふざけんなー!! 橋本には闇合

男子「そうだそうだ！！！」

男子「 そうだ！！ 委員長とそこの一 人を差し出せば！！ 」

关庙「えつ

狼牙

「やつてみれば？」

男子「何だと？」

「だからやつてみればいいじゃないか？ まあ、そんなことをするれば、そいつか」の馬鹿のよつた田口会つと思つた。」

男子「…確かに…斬真には勝てないかもしけないが…お前と委員長なら…！」

前置きはいいから、ががって来ながなし

死ぬかも知れないぞ？

一人の男子生徒が椅子を持ち、珊瑚は向かって振りかぶる。

咲苗「あ、危な...」

早苗は反射的に目をつぶした

バキッ！！！

何やら嫌な音が聞こえ……

恐る恐る目を開いてみると…

男子「……」

「ハア、この程度なのか？」

床に気絶している男子生徒。

そして、先程の男子生徒が持っていたと思われる椅子か、メラメラと燃えていた

パチンツ

琥珀が指を鳴らすと、その椅子の炎は何事もなかつたかのように消えていった

男子「こ、こいつらは…い、一體…」

女子「凄い…」

狼牙「お前だつて人のこと言えないだろ。今の蹴りは……」

「ハハハ……「メン、流石にこれはやり過ぎたかもね」

狼牙「まあ構わないだろ、自分の保身のことにしか頭のない連中に
はいい薬にはなつたと思つぜ?」

兵太「……斬真狼牙……その白ラン……そのバツクル……もしかして【ホワ
イトファング】か!??!!それに……土御門琥珀のそのマントとわつ
きの炎……それに……目にもとまらぬ足技……お前は……【レッディドーラ「ゴン】
か!??!!」

狼牙「おう、俺も少しば有名なんだな」

「……出来ればその二つ名は呼ばれたく何だが……」

狼牙「どうしてだ? カッコいいじゃねえか」

「……何かどつかのカンフー映画かR-15指定映画みたいな名前だ
から」

ザワザワザワ……

先程よりも教室内のざわめきが大きくなつた

ホワイトファングとレッドドーラゴン

共に有名なB能力者で学生の間ではかなり噂になつていた
それが一人も揃つて同じ学園に入学したのだ

驚くのは無理はない

「さて……こんな場所じゃ色々と話せないから……何処か人のいないと
ころでも行くか?」

狼牙「おお、そうだな」

「一人が共に教室を出ようととした時…

咲苗「ま、待つて！…」

咲苗が一人を扉の前でどうせんぼをしていた

狼牙「…何だ、まだ何か用があるのか？」

咲苗「お、お願ひがあるの」

「了承」一秒

狼牙「早つ！？」

咲苗「ま、まだ何も言つてないのに！？」

「まあこの状況と俺達の二つ名知つた後に、入口を塞ぐ。これらの状況から理由を察することが出来るのはあたりまえなことだと思つが？」

狼牙「…お前凄いな」

「そりか？まあとにかく…委員長さんが望んでるのって、俺たちに戦つてほしこことだら？」の学園を支配してゐる番長と

咲苗「…ううん、私と一緒に戦つてほしーの

「へえ…」

狼牙「成程な。だがどうやつて戦うんだ？委員長が戦えるのなら今までだつてその機会はあつたはずだ。今になつて何故だ？」

「…狼牙、それは意地悪だよ？…とにかく、その闇崎アギトつて言う奴は元はそれほど強い能力者じゃなかつたけど、ある日を境に急激に強くなり、元執行部を制圧した後、こんな状況を作り上げたつてわけね」

咲苗「うん…今までだつて私も行動しようと思つた…けど出来なかつた…」

狼牙「今更聞くが、何でこの学園をそこまで？」

咲苗「確かに、ここ最近はいい思い出なんてないわ。でも、この学園には私の…ううん、私達の思い出が詰まつてゐるんだもん。だか

…」

「……狼牙？」

狼牙「かなり厳しいものになるかもしれないんだぞ？」

咲苗「……その覚悟はもう出来るわ」

狼牙「やっぱ委員長はいい女だな。よし、なら今日から委員長も狼牙軍団の一員だ！！」

咲苗「あ、ありがとう」

「これからよろしくね、口比生咲苗さん」

咲苗「咲苗でいいわ。こちらこそよろしくね、土御門琥珀君

「じゃあ俺も琥珀でいいよ」

狼牙「俺は委員長って呼ばせてもうぜ」

咲苗「ええ、これからよろしくね、狼牙君」

狼牙「おつー！」

その後、陣内兵太と成瀬有紀が仲間になり、狼牙軍団は行動を開始することになった

主人公設定

士御門 琥珀 17歳

通称、レッドドラゴン

歴代より陰陽師として名高い家計の家で生まれたのだが、その家系はB能力者を魔物と同一と考える者のいる固定観念が残っていたある日、琥珀がB能力に目覚めると、そう言った考えの持ち主は皆手のひらを返したかのように琥珀を殺そうとしたが、皆返り討ちにあつた

その状況を危惧した琥珀の父が、琥珀に旅に出るよう勧める琥珀も古臭い家にいるよりも外で見聞を広めたかったため直ぐに承諾する

その時、琥珀は14歳になつたばかりだった
元々敬愛する兄に鍛え上げられていた為、実力はかなり高い
琥珀は旅を続けながらB能力を鍛え、その間にB能力を悪用する輩を倒していくが故に二つ名がつけられた

腰まで届く長く赤い髪に黒く透き通つた目、黒いロングコートの下には力斯塔マイズされた銃二丁に短刀4本、腰には脇差を仕込んでいるが、めつたに使おうとはしない
他にも体の至る所に暗器を仕込んでいる

B能力は炎もしくはそれに準ずるもの自在に操る能力
琥珀がもし本気で激怒したら、その対する相手はちりひとつ残らずに消滅する

普段はこの能力と足主体の格闘技で戦う

“秘義・ドラゴン＝クローア”

炎によつて加速した蹴り

度合いによって相手を切り裂くことも可能
付加効果によって切り口は発火する

好物は和菓子、特に羊羹と団子には目がなく、月に10度は専門店
を訪れて大量に買っていくが、その逆として辛いものはかなり苦手
で、もし辛い物を食べてしまったら、暴走を始める

趣味として菓子作りをしたりする

今まで女性と交流を持ったことが殆どないため恋愛経験はほとんど
ないが、興味がないわけではない

実はかなりの情報網を持ち、その情報源は当人以外には固く秘めら
れている

そして、ようやくこれらの行動方針を纏めようとしたのだが…

男子「俺達にも戦わせてくれないか！？」

女子「わ、私も…戦えないけど…何か出来ることはある？」

狼牙も俺もクラスメイト達に囲まれていた

先程の強さを見せ、これから学園生活を変える可能性が見えたのか…

次々と狼牙軍団への参加を希望してきたのだ

勿論、狼牙も俺もその気持ちを受け入れ、一人一人出来ることや能力…また、他のB能力者についての情報を集めるなどをしていたら…昼休みになっていた

「ふう…とりあえず、この二階フロアに居る生徒達も大体が裏で協力をしてくれるかもしれないということになったな」

狼牙「これはいい出だしだな」

「その代わり、俺達が今後どうやって行動するか決めるのが遅れたがな」

兵太が言うには、この学園に居る能力者達の大半が番長に対しても満を持している

だから、説得すれば協力を受け入れてくれるかもしれないということなのだ…

狼牙「…三階から行くか…それとも一階から行くか…それが問題だな」

「…ふむ、狼牙。提案があるんだが？」

狼牙「何だ？」

「俺は昔から単独行動が得意だったからな…そこで、俺は一人で一階に行つて協力をしてくれそうな奴らを探してみる…その間、狼牙は

咲苗さん、兵太、有紀を連れて三階を占領しておいてくれないか?」

狼牙「…大丈夫なのか?」

「心配するな。目立つ行動は控えるし、何かあつても脱出集団は用意しておくから。それに大半の戦力が三階に集中してれば一階に俺がいるなんて気付かないだろ」

狼牙「…確かに、同時に攻めるには今は戦力が圧倒的に足りないしな…琥珀、任せてもいいか?」

「おう」

こうして琥珀は一階へ

狼牙たちは三階へ向かうことになった

一階

「ふむ…まあこんな所だろ」

しかし…風紀委員は分かりやすい恰好で助かつたよ似たような顔ばっかでキモイが…
刀も使い方も下手糞だし…

こんな連中に良く支配されてたものだ

一年女子「あの…大丈夫ですか?」

「ん…君たちこそ大丈夫かな?」

一年男子「はい…僕らは大丈夫ですけど…」

「俺は狼牙軍団の一人、土御門琥珀って言うんだ。この学園の番長を倒すために行動してるんだけど…君達も協力してくれないかな?」

一年女子「え…でも…」

「…別に前線で一緒に武器を持つて戦えなんて言つてないよ。ただ、君達は今の学園のままでいいと思つていいのかな?」

一年男子「…それは…」

「俺は今の学園を変えて…斬真狼牙の往く道を作り上げたい。でも、それを叶えるには俺一人の力だけではどうにもならないんだ。だが

らこそ、俺は皆の力を借りたいんだ」

一年女子「…私達に何か出来ることはあるのでしょうか…」
「それは君たち自身が見つけるべきことだ。俺に出来るのは…この力を有効に使って…狼牙や皆の助けになるようつに動く」と。今はそれだけだ」

暫くの間、全員の間で沈黙が続いた

「…直ぐにこたえる必要などないが…出来るだけ早く答えて欲しくはあるかな?」

一年女子「…少し、考えさせてもらつてもいいですか?」「ん、当然。君達が君たち自身の意思で決めないといけないことだからね」

そう言い残し、琥珀はその場から立ち去つていった

暫くの間、琥珀はフラフラと学園内を歩くことにした
こうすることで学園内に居る戦力になりそうな生徒が見つかるかも
しれない
そう思つて歩き続け…

「…体育館、ここって誰かいるのか（ブンシ）…居たね」
何かを振りかぶる音が聞こえ、その方に向かつてみると…
竹刀を一本持つた女子生徒が一人素振りをしていた

？？？「誰だい！？」

「ああ、邪魔したかな？俺は土御門琥珀。この学園に編入したばかりなんだね」

？？？「ああ、あんたがあの…」

「え…知つてるの？」

？？？「さつき執行部の連中があたしのとこに来て協力しろって言

いに来たからね

「あ～、成程ね」

「？？？」でも、どうして執行部に田の敵にされてるんだい？」

「俺は今斬真狼牙つて言つ俺と同じ編入生と一緒にこの学園の番長を倒そつてことになつてるから」

「あ～！？」闇崎を倒すつて…本氣かい？」

「ああ、本氣だけど？」

「？？？」（じい～～～）@琥珀の田を覗き込んでいます

「？？？何？？」

「？？？」嘘はついてないみたいだね

「こんなこと嘘なんかじや言えないよ」

「？？？」それで…私に何か用？」

「いや、別に？」

「？？？」（ポカン）…い、一緒に戦おつとか…そつ戦つ」と言つて来たんじやないの？」

「俺は無理矢理誘つたりそつ言つことが嫌いだから。当人の意志を尊重したうえで、一緒に戦うかと聞くし」

「？？？」あ、あはは あんた面白いね」

「？ そうかな？」

「？？？」…「うん決めた！…え～と…琥珀、だつたよね？」

「ああ、君は？」

剣道「あたしは中西剣道。よかつたらあたしも一緒に戦わせてくれないかい？」

「ん、君がそつしたいのなら喜んで」

剣道「へへ、よろしくね。あ、それとあたしの妹も一緒に加えてもらつてもいいかい？」

「ん、妹が居るの？」

剣道「ああ、弓道は今多分教室に居るから…一緒に来てくれるかい？」

「？」

「了解した」

その後、弓道のいる教室に案内され剣道と共に説得し、中西姉妹が狼牙軍団に加わってくれることになった
一方で、狼牙も屋上を制圧する際に知り合つた宮里絵梨花、サキ、ショーコという三人組が仲間になつてくれることになつたそうだったり言つたのか、三階だけじゃなかつたのか、
狼牙、制圧力凄いな…

狼牙「へへ…少しはまともな軍団になつてきたな」

「それはそうと…次はどこにする？選択肢としては体育館から制圧して、その後グラウンドに向かうとか、最初に正面玄関を制圧し、グラウンドって言う手もあるけど…」

狼牙「両方行けるんじゃないのか？」

「…まあ確かに行けるけどね…今はかなりの生徒が仲間になつてくれし…」

琥珀が再び一年生たちを説得しに行つた際に皆が協力してくれるとのことになり、その勢いで他の生徒たちにも協力を呼びかけたことにより、学園の約4割の生徒が狼牙軍団に入つてくれることになつた

「…じゃあ、どう攻める？」

狼牙「うーん…俺、委員長、兵太、有紀、絵梨花を中心に正面玄関を制圧した後、直ぐにグラウンドへ。で、その間、琥珀は剣道、弓ちゃん、サキ、ショーコを連れて部室棟に向かいつて言うのは？」

「…随分と俺の方はキツイな」

狼牙「お前が居るんだから大丈夫だろ？」

「まあな…唯その編成だと俺は直ぐにはグラウンドには向かえないぞ？大丈夫なのか？」

狼牙「平気だ。委員長や兵太、有紀も最初のころよりも強くなつてるしな」

「…ならそれで行くか」

こつして琥珀は部室棟に…狼牙は正面玄関へと向かつていった

琥珀サイド

「やれやれ……これは大変なことになりそうだな」

剣道「そつは言つてもあれくらいの数ならなんとかなるんじやないのかい？」

剣道が指差した方にはそれなりに多くの執行部員とそれに無理矢理従わされているような生徒達が居た

「……まあまずは執行部員達を潰して、他の生徒達には説得つて感じで言つたほうがいいと思つ。ここはあくまでも制圧するべきところの一つでしかないんだし」

剣道「あたしはそれに賛成だよ」

弓道「そ、そうですね……皆さん、執行部の方々に脅されてやつているという方が多いですし」

「……じゃあ後ろは任せてもいいかな？」

剣道「ああ……つてあれ？」

剣道の承諾を得る前に突撃を始めていた琥珀

剣道「たく……」

弓道「……お姉ちゃん……」

剣道「……何？……」@弓道が指した方を見て見る

琥珀が突撃したところは既に阿鼻叫喚と言つてもいいくらいに悲惨な光景が広がつていた

琥珀に武器を向ける者には琥珀が容赦なく蹴りを浴びせ…
脅えたものの武器を蹴りあげ…大声を出し、怯ませる

中西姉妹「…………」

サキ「あ、あの…」

シヨーコ「わ、わすらも突つ込んだ方がいいですか？」

中西姉妹「…………そうだね（そうですね）」

「？本当のことだけビ、ってああ。普通の人には見えないから信じられないよね」

剣道「こ、琥珀には見えてるのかい？」

「ああ、俺の家系は代々陰陽師だったからね。そう言つたものは普段から見えてるんだよ」

きなこ「なかなか話が合つないので面白いです~」

剣道「……」

「まあ、悪さをするわけじゃないからそんなに気にしなくてもいいと思ひだ?？」

弓道「そう…ですか」

「とりあえずここは制圧したし…早く狼牙たちと合流しないか?」

剣道「そ、そうだね」

とりあえず体育館には協力をしてくれると約束をした生徒達を配置し、琥珀達は新たにきなこを連れ、グラウンドに向かうこととした

狼牙サイド

狼牙「へつ！！こんなものか？」

既に敵側の生徒の8割を倒し、グラウンドはほぼ制圧した狼牙たちは今は追撃戦に入っている最中だった

狼牙「ハツ！！」

バキッ！！

執行部員「ぐあ…！」

ドサッ

狼牙「へつ、こんなもんじやないぜ」

咲苗「狼牙君、こつちは皆狼牙君に降伏するつて」

兵太「狼牙さん！…こつちは全員降伏するつて」

絵梨花「こつちも終わつたよ」

狼牙「へつ、大したことなかつたな」

「あ、狼牙、こつちも終わつたみたいだね」

狼牙「お、琥珀じやねえか。つてことはそつちも終わつたみてえだな」

「ああ、それとこれから仲間になる人も出来たよ」

狼牙「おづ、よろしくな」

「早速だけど、こここの状況を詳しく教えてくれない？」

咲苗「とりあえずグラウンドの制圧は終わつたみたい。ここがすんだら次に制圧すべき場所は体育館、部室棟（ボクシング部）、プール…そして…」

「奴のいる場所つてことだね」

剣道「でも闇崎のいる場所に行くにはエロがいるからね…多分、山本無頼なら持つてると思うけど…」

「確かにボクシング部の部長をやつてる人だつたよね…仲間になつてくれると嬉しいんだけどね」

狼牙「まあ説得してみないと分からぬからな」

「…今後はどう動くか…それを決めないとね」

狼牙「とりあえず少し休息を取らないとな。勢いに身を任せてかなりの場所を一気に制圧したからな」

「じゃあ、とりあえず俺は情報を集めることに集中するから」

弓道「だ、大丈夫ですか？琥珀さんはずっと前線で動き続けてたは

ずなのに……」

「これ位で疲れるわけないでしょ……」そんな軟な鍛え方はしてないよ

狼牙「……なら悪いが少し頼めるか?」

「ふふ、了解」

こうして狼牙たちは一時休息、その間琥珀は情報活動に移ることになつた

「……それで、どこから行つたものか……」

- | | | |
|---|---|------|
| 1 | ・ | プール |
| 2 | ・ | 更衣室 |
| 3 | ・ | 体育館 |
| 4 | ・ | 部室棟 |
| 5 | ・ | 体育倉庫 |

……「」から一番近いのは体育倉庫だけ……

がたんっ！――！

ん……体育倉庫の中から音がするな……
少し調べてみるか

男子生徒「へへ、ほら――わざと脱げよ――」

? ? ? 「……うう……」

男子生徒「……自分で脱ぎたくないのなら、俺達が脱がせてやつてもいいんだぜ……」

? ? ? 「……ひつ――！」

男子生徒「ほら、早く……」

「……そんな粗 ン丸出しで恥ずかしくないのかね……」

男子生徒「――――――――――――――――――――」

一人の女子を7人の男達が集団で襲いかかろうとしてる場面に遭遇するなんて…俺って運が悪いのか…それとも…

男子生徒「な、何だお前は！？」

「……土御門琥珀だ。一応、狼牙軍団の一人なんだが……」

えつ
：なに？

俺の名前を聞いた途端は顔色が悪くなつて、狼牙軍団つて名前だしたら悲鳴を上げ始めたぞ?

男子生徒「れ、レッドドラゴン…」

男子生徒たる者には、強烈な情に容赦のない才能者たる者には、

え、
何それ

俺の評価ってそんな酷いの？

「…俺のことが分かつたのならひとつと失せろ…田障りなんだよ」
なんてドスの利いた声を出してみました

۱۰۰

うわあ……ここまでビビられる俺つて……

「……ハア、君大丈夫だつた?」

「……あ、はい……ありがとう」「やれこます」

「気にしなくてもいいよ 僕は実際何もやつてないし」

「……あの……貴方があの噂の……」

「土御門琥珀つて言うんだ。君は?」

「……あ、根岸なななです」

「じゃあなたなつて呼ぶね 僕のことは琥珀つて呼んでよ」

ななな「はい……あの、琥珀さんはどうして学園の番長に……」

「倒すため」

ななな「え、でも……」

「最初から無理だと思つて何もやらなかつたら結果は何も変わらない。でも何かしら行動を取れば必ず結果は変わる。それが良くなるか悪くなるかは本人の力量次第だけね」

ななな「……」

「さてと、こんなところにいつまでもいるわけにはいかないね……俺はさつさと仕事に戻らないと……」

ななな「あ、あの……」

「ん?」

ななな「わ、私を……ろ、狼牙軍団に入れてもらえませんか?」

「……厳しい戦いになるよ?」

ななな「琥珀さんの言つたように……何もやらずにただ見てるだけなんて……もう嫌なんです……少しでも……少しずつでもいいから……私も……変わりたいんです……だから……!」

「ふふふ オッケ、俺から狼牙には話を付けるよ」

ななな「あ、ありがとう」「ざいります」

「これからよろしくね、ななな」

ななな「は、はい!」

こうしてなななが狼牙軍団に加わり…
一度琥珀はなななを連れ、狼牙の元へ

その後、琥珀は再び学園の情報活動に戻った

約2時間後：

「ただいま……つてあれ？」

「？？？」「はつはつは…！狼牙よ、この兄に任せとけ」

狼牙「…ハア」

久那岐「…グルツ」狼牙にすり寄る

狼牙「ああ…大丈夫だ。心配するな、久那岐」

「…狼牙、戻つたよ」

狼牙「あ、琥珀か…情報の方はどうだ？」

「それなりかな…言い情報と悪い情報があるよ」

狼牙「…悪い方から聞く」

「ん、外から集めた情報なんだけどどうやら聖城学園がいの学園の動きが少し活発になりつつあるって噂を聞いた。恐らくだけど…【獄煉】がPGGからの脱退を表明する可能性ありだよ。だから早めに闇崎を倒して、関東制圧に向けての準備を始めたほうが良さそうだね」

狼牙「…分かった、でいい情報つて言つのは？」

「戦力になりそうな人たちのリスト。まず、山本無頼だけど…闇崎に対して良い感情は持つてないみたいだ。多分説得するなら仲間になってくれるよ。他の能力者だけど…生徒からは後一人、堂本瑞貴って言う水泳部員の子。それから教員側にはフランシーヌ山咲先生と伊集院玉利先生が戦力になりそうだ。けど、この二人、何か仲悪いみたいで…どちらか一人のみしか仲間に出来そうにないよ」

狼牙「…とりあえず、先生のことはおいておいて…堂本瑞貴はプー

ルに居るのか？」

「そうなるね。でも早めに動いた方がいいかもしないね。闇崎派の生徒が女子生徒達を陵辱しようとしてるみたいだったから。実際、俺がなななを助けた時もなななは危なかつたし……」

突然名が出たせいなのか……なななは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった

狼牙「……ならプールには俺と委員長、絵梨花、久那岐で行つてくる」「ん、その間俺は剣道、弓道、きなこ、なななと体育館を制圧しておくから……ところで……さっきから大声で笑つてるあの入つて……」

狼牙「……俺の兄貴だ……」

「……」

何か……兄さんに聞いてた話と違つ……

兄さんが話すには斬真豪は冷静沈着でいつも俺達を引っ張つてくれた頼れる人だつて……

でも……何だろう、この人からは何か不安しか感じないのだが……

狼牙「兄貴……少し黙つてくれ」

豪「はつはつは……ところで……そこの子は？」

狼牙「……土御門琥珀だ」

豪「……！」

土御門という性を聞いた瞬間、先程までの顔が嘘のように豹変した驚きを全く隠せていない表情だ

「……」んにちは、土御門翡翠の弟……土御門琥珀といいます」

豪「……そうか、あいつの話してた……翡翠は……元気か？」

「……病氣で他界しました」

豪「……やつが」

「……兄は、ずっと俺に貴方のことを話していました……」

豪「……」

「……へどうか…したんですか?」

豪「い、いや…何でもない…」

…何か…俺の顔に着いてるのか?

豪「（…似ている…いや、似過ぎて…あの頃の翡翠をそのまま
映したかのようだ…だが…目の色は異なる…アイツの色は…深紅だ
ったからな…）」

うへん…ネギまの方が書けなくなつてきた

理由は二つ…

モチベーション

そして原作忘れた

こつちだと本が手に入らないから厳しい

他の小説などを参考にさせていただいているんですが…

琥珀の情報から狼牙はプールに向かうと陵辱されかけている堂本瑞貴がいた

いや…当の本人はそんなことお構いなしに占いの本を見ていたそうだが…

ある意味大物だな…

まあ占いの結果で狼牙と一緒にいることがいいという結果が出たそうで…一応仲間になるつてことになつたけど…なんだかなあ…

その後、狼牙は俺と咲苗さんを連れ、保健室に向かうこととしたまずは話をすることにしてみようといふことになり一人の先生に順番に会いに行くことになつたのだ

まあ結果としては…何故か俺の容姿を見て…何か惹かれたのか…フランシース先生は速攻で協力を承諾した

その間、俺は寒気が治まらなかつた…

何だろう、この感じ…

その後、一応俺達は伊集院先生の元に向かい…

何故か伊集院先生もフランシース先生と同じ反応をした…

…正直、気分が悪い…

伊集院先生もフランシース先生と同配置でなければ協力してもいいということで何故か一人の先生の力を借りることができた…何か針の筵を着こんでしまつた気分にはなつたが…

「選択、間違つたかな？」

狼牙 - 積極張り

「そこでそんな慰め方しないで、虚しくなるから」

氣分を取りなおして、後は執行部室のIDを持つてゐる可能性のある山本無頼の元に行くわけだけど……

ガラツ…
そのため、狼牙、俺、咲苗さん、久那岐さん、剣道、なななの六人を中心一般学生20人を引き連れ、部室棟に入り…
まだ執行部員の人たちが残つてゐるのだから

やはりメインのボクシング部を訪れたことにした

山本「：来たか」

狼牙 - おう、あんたが山本無賴か?」

卷之三

山本「何だ?」

「…なんて言えばいいのか…貴方から闘志の欠片も感じないのです

か……どうかしたのですか？後貴方の後ろに何か変なものが隠してあるんですけど？」

琥珀がその憑いている者のことを探すと山本無頬は完全に脅えきつた顔をしてブルブルと震えていた

狼牙「……何だ、この情けない奴は…」

「あ～、狼牙にも見えないんだね。今、山本さんの後ろに30代後半のボクシンググローブ装着したおっさんがいるんだよ」

狼牙「？？？何言ってんだ、そんな奴いねえじゃねえか」

「ま～、幽霊だしね」

狼牙「？？？」

「多分、山本さん靈感が普通の人よりも強いから見えない物が見えちゃうんだろうね」

狼牙「つまり靈感が強いってことか？」

「加えてどうやら山本さん自身幽霊とかそういうたものが酷く苦手みたいだね。だからあんな風に脅えてるんだよ」

狼牙「…お前も見えてるのか？」

「一応ね。ねえ、山本さん。もし狼牙軍団の一員となつて力を貸してくれるのならその幽霊が見えてる状態をどうにかしてあげようか？」

山本「ほ、本当か！？」

「嘘は言いませんよ。どうしますか？」

山本「分かった！！だから早くこれを…！」

うわあ…必死過ぎるよ

「とりあえず…信頼の証としてIDを渡してもらえますか？」

山本「分かった。斬真狼牙。これがそのIDだ。これからはよろしく頼む」

狼牙「ああ 糸目男爵」

山本「な、何だそれは！？」

狼牙「ん、何つてお前の渾名だが」

山本「い、糸眼つて…OTZ」

「…狼牙もつ少しもなあだ名にしてやれり

山本「おお」

「せめてぶつちーとか」

山田「何か嫌だあああああああー——————」

「じゃあライライ」

山本「何だそれは！？ 何故そんなあだ名になる！？」

「じゃあ糸眼ということで決定ね。もつめんどいから」

山本「…もう糸目男爵でいいです」

無頼は悲しみを背負つた

12の経験値を得た

謎のアイテムを手に入れた

無頼「ちょっと待て！？ 何だこの謎のアイテムって」

「ん、ああ。説明し忘れたな。これは一応、糸目男爵の靈感を抑える役割を持つてるんだ」

無頼「…そういうえば、見えない！ さっきまで見えてた幽靈が見えないぞ…！」

「それをちゃんと体に身につければ靈達も寄つてこなくなるから。でも、幽靈スポットとか靈の集まり易い場所にはいかないでね？」

無頼「？ 何故だ？」

「時にそういう場所つて靈の住処だつたりするんだよ。で、そのアイテムは靈にとって毒のようなものだから…危険視されて殺されちゃうかもしれないから」

無頼「ひいいい！」

「あ、でも対呪の効果も持つてるから余程強い靈じゃない限り大丈

夫だよ」

無頼「そ、 そうか…」

「それよりもこれからよろしくね、 山本無頼先輩」

無頼「ああ、俺の拳、お前らに預けた」

「うして山本無頼、伊集院玉利、フランシーヌ山吹、堂本瑞貴が仲間に加わり、更に他の生徒の7割が仲間に加わることとなつた

「さてと… 狼牙？ これで後、残つてるのは執行部の残党と闇崎アギトのみだ」

狼牙「ああ、一気に終わらせよつぜ（ボキボキ）」

「ストップ」

狼牙「ああ？ 何だよ」

「狼牙は大将なんだから、闇のアギト（笑）と一緒に打ちしてもらわないと。だから、残党の一掃は俺を中心に任せてもられないかな？」

豪「その意見には俺も賛成するぞ、狼牙よ」

狼牙「兄貴… そうだな、任せても良いか、琥珀」

「ふふ、了解した。メンバーは俺、剣道、弓ちゃん、きなこ、糸田男爵、兵太、有紀、ななな、瑞貴で残つてゐる咲苗さん、絵梨花、シヨーノ、サキ、久那岐さん、豪さんは念のため狼牙の周りにいてもらおう。先生達にはそれぞれ学校への説明をしてもらつてゐるから」

咲苗「説明？ 其れつて何の…」

「あはは それは後のお楽しみだよ、咲苗さん」

狼牙「例の件、もう手配したのか… 早いな」

「案外簡単に先生が一人も協力してくれることになつたからね。交渉が楽になつたんだよ、後は狼牙が番長倒して契約完了つて感じかな」

狼牙「よつしゃ、そうこう」となら話が分かり易くて良い」

「頼むよ、ホワイトファング」

狼牙「そつちこわしぐるなよ？ レッディアゴン」

「つして聖城学園最後の戦いは始まつたのだが、

実際、そこまで苦戦するというものではなかつた
実は攻める直前日和見していた学生達が狼牙軍団に加わりたいと言つてきたのだ

これにより、聖城の9割以上の生徒達が狼牙軍団に参加したということになつた

数も質も勝る狼牙軍団

それにより、完全に戦意を失つていつた執行部の生徒は次々と無条件降伏してきたのだった

狼牙「…つまらねえな」

「まあまあ、戦わなくともいいって言つのは一番良いことだよ」

狼牙「まつ、そなんだけどな」

「それよりも…（バキッ）」

狼牙「ああ、こいつにはとにかく地獄を味わつてもらわないとな…（バキッ）」

アギト「ひ、ひいいいい…」

調子づいた狼牙たちは無頼から受け取ったIDを使用し、闇崎アギトの居る地下室まで入り込み、アギトと直面することになった勿論、最初に始まつたのは口上戦

だが、その際アギトは言つてはならない禁句を言つてしまつた

狼牙に【茄子頭】

琥珀に【男女】と…

最初こそ、そんな低俗な悪口はどうと思わないようじょいつとし、狼牙を止めていた琥珀だが…

【本当にちこ付いてんのかあ～？】とか【男に抱かれてる】とか

【その茄子と出来るんだろう】などと言われ続け…

比較的、狼牙よりも温厚な琥珀も…

ブチッ！！！

キレた

そして二人によつてフルボッコ

最後の手と学生ボタンに手をかけようとしたが、琥珀がそれに気付
き懐からワイヤーを取りだし、それを使ってボタンを奪取
一気に形勢が逆転し…現在

バキッ！！ グシャツ！！ ドカッ！！

シロシロシロシロシロシロシロ

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！」

パンチと蹴りのラッシュを浴びるはめになつたアギトだつた

こうして狼牙たちの最初の戦いは幕を閉じた

因みに…アギトは全治半年の重症を負つた

その後、狼牙は久那岐に学生ボタンを使って元の姿に戻そうとしたのだが、一つでは足りないということが分かり、もっとボタンがいることを理解していた時…

琥珀はとこうと

「俺は女じやないしちゃんとち こだつてついてるもん… 機能だつてするし… ピ なことだつて定期的にしてるもん… ああ、この女顔が悪いのか… こんな顔に生まれてきてるから俺はあんなこと言われるのか。でも顔つて髪とかと違つて変えようがないし… ど

「うしゅうってんだよ…」

蝶ネガティブになつてた

剣道「うわあ…誰かあの琥珀どうにかしなよ」
ななな「ど、どうにかと言われても…」

きなこ「うわあ…何だか今の琥珀さんの雰囲気に連れられてグリモアちゃんのお友達が沢山寄つてきますね」

「うう…ふう、ちょっと外の空気吸つてくるね」

何か体からドナドナや荒城の月、魔王辺りの曲が流れているのではないかと思える位に暗い雰囲気を持つたまま琥珀は気分転換の為外出することにした

無論、それを止められる生徒は誰一人としていなかつた

加えて、アギトを倒し簡単な事務処理や後片付けを終えた後、狼牙は皆を校庭に集め大演説会を開き、全国に進出する決意を表明し皆の指示を得たのだが…

その場に琥珀が居なかつたことに気が付いたのはすべてが終わつた後だつた

河川敷

「ふう…ようやく落ち着いたな。あ、かなり久しぶりに切れたよ

本当に…一応俺も男だから男の沾券に関わることを馬鹿にされたからなあ。まあもう大丈夫だわ」

その割にはかなり長い間この場所にいたようだつた琥珀の近くには空き缶やお菓子の山が：どうやらやけ食いしていたようだ

「さて… そろそろもど（ゾクツ）ツ…！」

琥珀は急に今まで感じたことのない寒気を感じた自分はこれまで様々な場所を渡り歩き、色々な人々と関わりを持つたと思っていただが、その人生の中これ程の寒気を感じたことは未だ嘗てなかつた…いや、違う

この気配は… 品どこかで？

その方に頭を向けてみるとそこには一人…いや、正確には男性が女性を抱っこした状態で立っていた

「…（ヤバい、良く分からぬけどこの男性はかなりやばい）」
冷えた視線、虚空ではないが氷のように冷え熱をも奪いかねない輝き

？？？「…ふ」

「？」貴方は一体

？？？「君はどうやら【資格者】のようだ」

「？」何を言つてゐるんだ

？？？「この娘、貴様に預けよう

「はい？」

？？？「クツ…奴が来る。ではな、また余おつ。土御門の血を引き
し者よ。ザンマの血を持つ者によるじく言つておけ」

「ツ…？」（ここつ…もしかして）

その男は宣言通り琥珀の前に抱えていた女性を置くと、まるで幻だ
つたかのように消え去ってしまった

「…あいつ、もしかしたらあの事を… それよりも今は…」

琥珀は自分の目の前に置かれた女性の体の状態を確認することにした
頭部から血が出ていて…恐らく脳を強く打つたから今は氣絶してい
るだけなのだろう

加えて全身にある切り傷や火傷のあと…

何処かで戦闘でもあつたのではないかと思える傷跡

そして何より琥珀が驚いたのはこの女性が着てている服だった
この特徴的な服のデザイン

間違いなく、京の護国院のものだった

何故彼女は今日からわざわざ離れたこの闘京まで来たのか

そもそも彼女はどうしてこんな怪我をしているのか？

あの男との関係は何なのだろうか？

疑問に思えば思つほど彼女が只者ではないといつゝことが良く分かった

「…とりあえず聖城に（ゾクツ）殺氣ツ！？」

琥珀は急ぎその場を離れ、自分がつい先程までいた位置を見てみるとそこには立派な刀があつた

もし少しでも反応が遅れていたら自分は今頃真ツ二ツになつていただろう

其れを握っているのは先程まで完全に氣絶していたと思つていた女性だった

？？？「ヴヴヴヴ…」

「？ 理性を失つてゐるのか？」

？？？「口口サナケレバ… 口口サレル」

「…成程ね、ここに来るまでかなり厳しい道のりだったみたいだね（加えて彼女の過去に何かあつたんだろうねこれは…今度、護国院について念密に調べてみよう）」

？？？「うあああああーーーーー！」

「ツヒ、あぶねえ！？」

再び斬りかかつてくる女性

其れをそれとなく避ける琥珀

だが…琥珀もただ避けていたわけではなく…

？？？「！？（ギギギッ）」

「ふう～、理性失ってるみたいだつたから簡単に引っ掛けつてくれてよかつたよ」

琥珀は避けながら、ワイヤーを彼女の体に巻きつけていき見動きを封じることに成功したのだ

だが、そんな状態になつてもその女性は懸命にその場を動こうとしていた

「
ザツザツ
…」

ゆつくりと

琥珀はその女性に近づいていった

「？？？」　「クルナ…クルナ！」
「（ギュッ）」
「？？？」　「…え」
「大丈夫だよ、君を傷つける気なんてないし。今ここには君のこと
を襲おうなんて人はいないから」
「？？？」　「…あ」
「だから、少し休んでいいんだよ」

琥珀は優しく、ゆつくりと女性に語りかけ、説得していった

次第にその女性も琥珀の声に反応し、落ち着きを取り戻した後に寝入ってしまった

「ふう」

その場が何とかなったことを確認すると、琥珀はようやく一息入れることが出来た

「本当に……この学園に来てから退屈しないね」

少し休んだ後、琥珀は女性をお姫様抱っこして学園に連れて行つた勿論、そのことで狼牙たちに言及されたのは言つまでもなかつたのだが……

何故か一人、斬真豪の顔が少々変化したのを琥珀は見逃さなかつた

暫しの休息（前書き）

う～む… いやあやっぱ古いゲームのせいか読者少ないですね
まあ私自身がこのゲームに思い出るので書き続けますけど…
ランスとか戦極姫の方が良いのかな?
どちらも好きですけど…

暫しの休息

狼牙「で、何だつたんだあの女は？ しかも琥珀、せつかく全国進出宣言の際にお前が話す時間も作つてたつて言うのにはなかつたし」「なはは、悪い悪い。ちょっと久しぶりに心にダメージ負つたから外で少しの間、休息を取つてたんだ。でも、戻つてこようとした時、急に強い寒気を感じたからその先を見てみたら2人の男女が居たんだ。そのうちの一人が俺の連れてきた彼女つてわけ」

豪「二人？ もう一人の男はどんな奴だつたんだ？」

「…それが、不思議な男で危険な男としか言えないですね。特徴的なのはとてもなく高い身長とまるで氷のよつな目付きと長い髪… そうですね、ちょうど久那岐さんと同じ銀髪… だつたと思います」

狼牙「だつたと思つて…中途半端だな」

「仕方ないだろ？ 寒気と同時に強い殺氣を感じたんだから。あれだけの嫌な予感は今まで一度田なんだよ… つてどうしたんですか、豪さん？」

豪「 い、いや…なんでもないよ。（まさか…な）」

自身の報告を終えた後、咲苗が保健室から出てきた
どうやら助けた女性の傷の手当では終わつたようだ
因みに琥珀はすり傷一つ負つていなかつた為、治療の必要はなかつたのだが…

咲苗「怪我の状態はもうそれほど酷くないみたいよ。フランシース先生に一応見てもらつたけど、深い傷もないから後は目が覚めるのを待つだけみたい」

「そうか…良かつたよ」

咲苗「でも…いいの？あの制服つて」

「護国院の者だつて言いたいんでしょ？」

狼牙「護国院？ どこだそれは
「京を中心に強大な勢力を保持する勢力だよ。近年は近代化の波に押されつつあって、権力も薄れつつあるけど、昔は異常ともいえる位の権力を保持してたんだ。その最大の理由が呪的守護。成功祈願や占いを生業にしているんだよ」

狼牙「へえ」

咲苗「詳しいのね、琥珀君」

「旅の最中色々と話は聞いてるからね。因みに主な傘下学校559校。総学生数は28422人にも及ぶようだ。

幹部の数も凄いし、こちらは番長以外にも総長や忍者部隊、噂だと凄腕の剣士もいるつて言われてるよ」

豪「……」

「まあそんな中、俺にも分からぬ單語があつたんだ。それが…【
封印の巫女】」

狼牙「？【封印の巫女】何だそれ？」

「さあ？ 文献で調べても全く分からぬことだつたんだ。多分、誰かが意図的に閲覧や調査出来ないよう仕向けているんだろうけど…この言葉、俺昔どこかで聞いたことがあるような気がして…」

豪「誰からだ？」

「兄さんですよ。兄は死ぬ前に俺に色々な事を教えてくれたんですね」

豪「そうか…」

他にもいくつか疑問に思つことを挙げていく琥珀
そんな中…

ガラツ…

？？？「…」

「あれ？ あなたはもう起きても大丈夫なんですか？」

？？？「ええ」

「そうですか、怪我の方も大したことがないそうで良かったです」
？？？「えつと…私のことをここまで運んでくれたのは、貴方ですか？」

か？」

「ええ、俺は土御門琥珀と言います。貴方は？」

？？？「京堂扇奈と申します」

「では扇奈さんと呼ばせてもらつても？」

扇奈「出来れば呼び捨てでお願いします。私は琥珀さんと呼ばせて
もらいますね」

「分かつた。じゃあ扇奈、いくつか聞かせてもらいたいことがある
んだけど…」

扇奈「…多分、お答えできるのは少ないと思します」

「？ 何故だ」

扇奈「実は…私は、名前以外のこと思い出せないんですよ」

狼牙「記憶喪失ってやつか？」

扇奈「はい…最後に覚えてているのは強い衝撃が私を襲つてきただ
い」とくら』で…」

「…それが怪我の原因だと？」

扇奈「恐らくですが…」

話を聞いていたりに琥珀は扇奈が何か隠していると感じ取った
そんなに都合よく記憶がなくなるのだろうか…否
多分、こちらに知られたくないことがある為、それを隠しているの

だらう

狼牙や豪の顔からもそつ考へてゐるといふことが分かつた

狼牙「じゃあ、扇奈はこれからどうする予定なんだ?」

扇奈「…分かりません」

狼牙「そうか。なら扇奈、俺が琥珀の女にならねえか?」

「…は?」

扇奈「え、ええと…」

狼牙「その服装は護国院の物らしい。京まで行くにはまだ時間は掛かるだらうが、俺たちはいすれ全国制覇する。だから、俺達と一緒に来ればいすれ京に行く。それに扇奈一人で外に出るのは色々危険だしな」

「ふ、狼牙? それに関しては俺は賛成だけど…どうして…そ、そ
の」

狼牙「ん? だつてこんなにいい女なんだぜ? 放つておくのは野暮だらう」

咲苗「ちょ、ちょっと斬真君!…」

扇奈「分かりました 私は…」

一息間が空き…

扇奈「…琥珀さんの女になります」

「は、はあああああ――――――?」

琥珀の絶叫が聖城学園に響き渡つた

まあ琥珀の声は中性的だから絶叫と云ふよりも悲鳴に近いのだが…

「な、何で俺なの！？」

扇奈「琥珀さんは私のことを助けてくれました…それに体が覚えてるんです。私、琥珀さんと戦いましたよね？」

「あ、ああ…まあね」

扇奈「私、強い男の人人が好きなんです。琥珀さんはお強いんですね？」

「…どうだろ」

狼牙「琥珀は狼牙軍団の副長をやつてるんだぜ？しかも、通り名が【レッドリーゴン】って言われる位の実力の持ち主だ」

扇奈「そうですか… とこう訳でよろしくお願ひしますね、琥珀さん」

「…まあとりあえず女とかそういう関係は置いておいて…仲間という関係から始めようよ」

扇奈「仲間…ですか？」

「…俺、狼牙と違つてそういう関係とは疎かつたから、そ、その…な、慣れてなくて…」

扇奈「ふふ、良いですよ… ですが…」

「…？」

扇奈「琥珀さんのその態度、益々気にいりました… ですから、少し強気に攻めさせてもらいますね」

「お、お手柔らかに…」

「…つして京堂扇奈が狼牙軍団に加わり更に戦力がUPした

咲苗「ホッ…」

狼牙「ん、どうした委員長?」

咲苗「な、何でもないわ」

狼牙「ははーん。さては扇奈が加わったからどうして考えたのか?」

咲苗「な、なななななーーー?」

狼牙「ふふ、可愛いぜ委員長」

咲苗「ちょ、ちょっと…アン、こ、こんな感じで…」

突然いちゃいちゃし出す狼牙と咲苗

それから逃げ出すように琥珀は扇奈の為の部屋を手配する為に扇奈の手を引きその場を離れていった

甘つたるこの空間が一人を包み込んだ

狼牙「今日は委員長の部屋に行かせて貰おうか」

咲苗「う、うん…／＼」

一方で、先程甘い空間から逃れた扇奈と琥珀はといつと…

「ふう、勘弁してほしいよ狼牙は… もつ少し自粛して欲しい」

扇奈「あの…琥珀さん?」

「えつと…どうかした?」

扇奈「えつと、私の部屋に案内していただいた後、是非琥珀さんの部屋に行きたいのですが… よろしいですか?」

「良いけど、何もないから面白くないよ?」

扇奈「いえ、琥珀さんの部屋だから行きたいんですよ」

「ん~、この後だったらなななと剣道、それにきなこも来る予定だけど…それでもいい?」

扇奈「お仲間の方ですよね? それにしても…女性の名前ばかりですね…」

「多分、皆今日俺が作ったお菓子を目的としているのだりうなび」

扇奈「お菓子…ですか? しかも自作…」

「扇奈も食べる?」

扇奈「ええ、是非」

扇奈の部屋に着き、そこで模様替えをするために専門家を呼んだのだが、あろうことが洋室を完全和室に変えて欲しいというのが扇奈の希望だった

最初はそれは幾らなんでも無理だらう…などと思っていた琥珀だったが職人さんは任せてくれたの一言だった

…職人さん凄いですね

手配を終えた後、扇奈と共に自室に戻る琥珀部屋に入ると既にそこには剣道、きなこ、なななの三人がくつろいでいた

琥珀の部屋は和洋折衷になつていて、半分が畳で半分がフローリングとなっていた

寝るときは布団で、食事や勉強などはフローリング上のテーブルで生活していた

「もう来てたのか。つてあれ?剣道、弓道は?」

剣道「ああ、弓道なら今ちょうどね。って琥珀、その後ろの女は？」

「ああ、紹介するよ。彼女は今日から狼牙軍団に入ることになった」

扇奈「京堂扇奈と言います。よろしくお願ひしますね」

剣道「ああ、あたしは中西剣道だよ」

きなこ「私は円読みなことです」

ななな「あ、あの…根岸なななと言います…そ、その…よろしくお願ひします」

「んじゃあ自己紹介序に少しの間会話でも楽しんでいてくれ。俺はその間、今日の菓子の用意でもするから。お茶は何が良い?」

扇奈「では緑茶で」

剣道「玉露で頼むよ」

きなこ「アッサムティーで」

ななな「え、えっと…じゃあ、アールグレイを

「…相変わらずバラバラなんだな。まあ良いけどね」

そんな我儘な注文にも全く文句ひとつ言わずにキッチンに立つ琥珀しかも自前エプロンまでして本格的にやる物だから

「…」

その場にいた女性4人が認めるほど、その姿が似合っていた

琥珀は料理をする際は長い髪が邪魔になる為、一つにまとめているつまりはポニー テールだ

加えて顔は中性的な顔立ちなため、そんなことをしていると女性に見間違えるのも無理はないだろう

実際に調理室や家庭課室で料理をする際、男女問わず琥珀に見とれてしまつこともしばしばあつたようだつた

きなこ「やはり琥珀さんにはあの恰好は似合いすぎですね」
剣道「そうだね、女のあたしたちですら綺麗だと思つちまつくらいだからね」

ななな「そ、それに…琥珀さんが作る料理、凄く美味しいです…」
扇奈「そなんですか？」

きなこ「ええ、きなこ達も幾度か御馳走になつてているのですが…何とも癖になる味で」

剣道「そうそう！あ～、あのマー・ボーカツカレーを思い出すと…（じゅるつ）」

ななな「け、剣道さん、涎垂れますよ（ふきふき）」

剣道「わ、悪いね。でもあの味は反則だつたよ」

きなこ「きなこはあの白玉餡蜜が好きですね」

ななな「わ、私は…オリジナルスペシャルクレープが好きです」

扇奈「そ、それは全部琥珀さんが自分で作つたんですか？」

きなこ「ええ、何でも旅の最中様々な場所でアルバイトしたり、色々な場所で自炊してたりしたらしく、料理洗濯などの家事はかなり得意らしいです」

ななな「だ、だから琥珀さんの部屋はいつも凄く綺麗なんです」

扇奈「そう言つてみれば…塵一つ落ちてませんね」

剣道「…多分だけど、琥珀つて普通の女よりも家庭的だよな」

ななな「…何だか女として大事なものを失いつつあるような気がします」

琥珀のスペックの高さに落ち込むつつあつた4人だったが、そんな雰囲気も琥珀が持つてきた物を食べた瞬間、一転してしまった

扇奈「美味しいです」

本日、琥珀が作ったのはフルーツタルトとスコーン
どうやら好評だったため、琥珀も嬉しそうだ

「良かった、タルトは何度も作ったことがあるんだけど。スコーンの方はどう？ そつちは初めてなんだよ」

剣道「美味しいよ、これはいくらでも食べられそうな気がするよ
きなこ」「でも体重が増えてしまいますよ～？」

「ななな」「うう…」

「ま、まあ一応カロリーオフできるよう砂糖とかは出来る限り使わないで作つたから」

きなこ「おおつ、女性に優しいヘルシーデザートといつ訳ですね。
グリモアちゃんにもぜひ食べさせたい位ですね」

「ああ、そうそう。きなこ、さつき頼まれたグリモアの拠り所の人
形の補修、やつて置いたぞ。これでいいかな？」

きなこ「おお、これはこれは。どうもありがとうございます」

剣道「なあ琥珀、今日は晩飯何作るんだ？」

「一応、ビーフシチューの予定だよ」

剣道「な、なあ？ 今日も弓道と一緒に食べてもいいかな？」

「ふふ、良いけど。そんなに気に入つたの？」

剣道「琥珀の料理は一流レストランの味にも劣らないからね。それ
にあたし達が一緒に食べる時はカロリーとか凄く気にしてくれるか
らね」

「せっかく食べても、うのなら気持ちよく食べてもういたいからね」

剣道「じゃあ、またあとで弓道に連絡しないとね」

「ななな」「わ、私もいいですか？」

「ああ、構わないよ」

扇奈「ふふ…」

「？ どうかしたの」

扇奈「いえ、皆さん凄く楽しそうだなって思いまして。それから…琥珀さんってやつぱり素敵な人ですね」

「そ、そ、うかな？」

扇奈「はい ますます好きになってしまひます」

3人「（ピクッ）」

「そ、そういうこと大声で言わないでくれないかな？ は、恥ずかしいから／＼」

扇奈「ふふふ」

ガシツ

きなこ「扇奈さん？」

剣道「ちょっと話があるんだけど」

ななな「お、お時間頂けますか？」

扇奈「…（キューン） はあは、成程、そういうことですか

いいですよ

剣道「悪いね。琥珀、またあとで来るから料理よろしく」

そつ言い残し、四人は琥珀の部屋から出ていってしまった

「…何かなななど剣道ときな」、少し殺氣立つてたな。何だつたんだ?」

鈍いとかそういう以前に経験不足のため女心を理解できない琥珀なのであつた

「…まあいいか、そんなことよつもー あよつばビヤフシチユ
ふんふんふんもつふーー」

シオンの癖その一

料理する際に必ずと言つていいほど妙な歌を口ずすむじと
だが、周りは止めようとしたがつた
何故なら…男の子と思えないくらい可愛いからーーーーー
うだ だそ

「らんらんらんーーーー、しゅわつちーーー (ザクッ) へいへいね
ーーー しううへーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
い?」

ジュウジュウ
コトコト…

・・・・・

キングクリムゾン！ すべての時間は消し飛ぶ！！

なんてやつてゐつたに特製ビーフシチューの完成
味見済み

「…ふむ、今日は8時と言つた所かな？」

上手に出来ました

といつ効果音が頭の中で響き渡つたよつた気がした

「どうあえず盛り付けやうは扇奈達が戻つてきたらこいつ

といつ訳で始めましたのはティーズ（P.P.Ver）です

「…（ピコピコ）」

それから一時間後…

今死ね！直ぐ死ね！！ 骨まで砕けろ！！！

「チヨツ！？ WWW ！」でそれは鬼畜ですから… とあぶね
！！ ふう、俺のジュー スが何とか止めを… よし…！」

崩龍斬光剣、消えろ！見切れるか！ 嘘らえ！翔破裂光閃！！

貴様に見切れる、術もない…

「ふう、何とか倒したな」

ガラツ

扇奈「も、戻りました…」

「そ、そう？ でもそんな汚れた格好で食事つて言うのはどうかと

想は、… あすは翌日の治療からしむるか」

「藤の葉の葉が闇にうつるカサカサ」

きな」「そこには聞かないと」ねですよ~

て怪我の処置頼めるかな?」「ああ頼むには無傷みたいだね」と云々

己道一あはい

「あ俺は……（×4）……あの誰も？」

扇奈「いえ、怪我の治療は是非琥珀さんにやつてもらいたいと思い

卷之三

ななな「あ、そ、その……わ、私もお願ひしたいです」

きな」「ほわ～、琥珀さん。私も頼めますか～？」

いや、俺とちゃんと分担した方が早いし、それに食事前に

らつてあるから皆で入つてきたり?」

弓道「う、露天を作つたんですか?」

「ああ、俺風呂好きだし。因みに岩風呂と洗い場とサウナ付だから」

扇奈「本格的なんですね

「まゝ、長い時は2時間入つてゐるくらいだしな。それくらいの設備

が欲しつて言つたら用意してくれたんだよ」

ななな「よ、良く用意してもらいましたね」

「ん…何か今回一番の功労者とか言われて、何か欲しいものないか
つて聞かれたから。それで露天風呂欲しつて言つたら」

剣道「…用意する方もする方だけ…露天欲しつて言つ琥珀も琥珀
だね」

「そうかな? 風呂は心の洗濯場所でもあるし、せつかくならいい
湯につかりたいでしょ? (ピーッ) つと、ちょうど湯船もお湯が
溜まつたみたいだ」

きなこ「? タイミングいいですね~」

「まあ俺が入る予定だつたからな。」のまま今日は来ないんじゃな
いかと思つたし」

扇奈「…何だか悪いですね。色々な意味で」

「気にするな。つと、扇奈の治療終わりつと」

扇奈「え! ? い、いつの間に…」

「ん? 話をしてる間だよ。因みにもうなななときなこの方も終わ
つてるよ」

ななな「あ、ほ、本当ですね」

きなこ「話に夢中になり過ぎて氣が付きませんでした~」

「剣道の方は弓ちゃんがやつてくれてるから。それに三人ともさほ
ど酷い怪我はしてないし。むしろ浅い傷ばかりだね」

剣道「どうして私だけ…〇TN」

弓道「お、お姉ちゃん? 大丈夫?」

「…まあそれはそうと…皆風呂入つて来なよ。つと、それからはい

「これ。タオルと一緒に、俺の服。サイズは合わないだろうけど、汚れた服よりいいでしょ？ 今着てる服は脱衣所にある洗濯機に入れておけばいいよ。あ、でも下着は止めて。俺、無理だから。流石にそれは部屋に戻つてから着直してくれ。加えて俺は部屋から出てるから。そうだな……大体30分くらい経つたら戻つてくるから」「扇奈……それは何だか私達が琥珀さんを一方的に追い出してる感じがしてしまいます」

きな」「…（ニヤリ）なら琥珀さんも一緒に入るといふのは？」

剣道＆扇奈――その手があつたか（ありましたね）」

「……な、何言ってるの？ え、俺の幻聴だよね？」

扇奈「いえ、ですか！」のままだと一方的に琥珀をさらに迷惑をかけ
てばかりじゃないですか？ ですからせめて、お風呂でお體中くら

いは流そ

卷之三

「だから何それ！？ も、ももももももももとは、ははは恥じらいをもぢなしゃい！－！－－－」

噛んだ

女性関係に全く違つて良いほど免疫のない琥珀ちゃんの口元は、これまでのものとは違つて、甘く、温かく、優しく、甘美な香りがする。

今なら山本無賴と仲良くなる様な気がしないでもない

「 そ、 そ う だ ！ ！ な な な と 『 ひ ゃ ゃ ん 』 は 嫌 だ よ ね ？ ！ 嫌 だ と

「言つてくれ！！！」

何だかこのままだとズルズルと引きずられて行きそうな予感がして

しまつた為、琥珀は何とか脱出路を見つけようと必死だ

「弓道「え、えっと…わ、私は…その、遠慮したいかな~」

「（弓ちゃん、GOOD JOB!!-b）」

剣道「ん~、じゃあ弓道はあたしたちが風呂にいる間、ここで待つてなよ。直ぐに出るから」

「……（・・・）あるえ~？ なんか逃げられないのは変わつてない？ ぐ、こうなつたらななに賭けるしかない…！」

一連の希望を託し…

「な、なななは嫌だよね！？」

「ななな「え、えと／＼／＼み、皆さんが入るのでしたら／＼／＼わ、私も…」

「…Oヒ、N○～～」

扇奈「さて…（がしつ）」

剣道「行こうか（ガシッ）」

きなこ「そうしましょう～（ガシッ）」

ズルズルズルズル

もう琥珀の意思とは無関係に風呂場に連れて行かれてしまった
そこで何があったのか…言つまでもない

「…た、耐えきつた//」

一部危ない場面もあつたが、昔兄、翡翠によつて鍛えられた精神修行が功をなし、迫りくる四つの女体からの誘惑（？）に耐えきつた琥珀だった

扇奈「立派でしたね」

剣道「あ～あ、あたしも男だったらあんな筋肉欲しかつたなあ」

ななな「た、確かに…琥珀さん、凄く鍛えられてました」

きなこ「ほわ～、あれだったら…」

「…OTN」

何だかもう男として凹みまくつている琥珀だった

今日はアギトに自分の傷口抉られるわ、扇奈に襲われるわ、恐ろしい男に遭遇するわ、Alive Hell（生き地獄（笑））に連行されるわで散々な日だったようだ

狼牙はどういつと…

久那岐「狼牙…」
狼牙「久那岐…」

委員長とのいちゃいちゃが終わり、自室に戻る途中に今度は久那岐の部屋に直行してた
どうやら狼牙は琥珀とは違つて最良の日のようだ

「……ハア」

弓道「だ、大丈夫ですか？」

「うん……」

弓道「ど、どう見ても大丈夫そうじゃありませんね。スマセン、お姉ちゃんが」

「…良いよ、ちょっと疲れただけだから」

弓道「…その割には顔が凄くやつれていますけど」

「気のせいだと思ってくれ」

弓道「ハ、ハア…」

琥珀は現在、弓道と共に夕食の支度中

他の4人はと、何を思ったのか風呂から出たと思ったら各自の部屋（扇奈は現在、仮部屋を使用している）

因みに服は琥珀が貸したものを着たまま出て行ってしまった

弓道「…お姉ちゃん達、一体どうしたんでしょうか？」

「…」されだけは言える、凄く嫌な予感がする

弓道「あ、あはは…でも琥珀さんって凄く不思議な人ですよね？嫌なら嫌つて言えばいいんじゃないですか？」

「…とりあえずあの4人が俺に対して好意を持ってくれてるのは一

応理解はしてゐつもりだから」「

弓道「あ、そこには気が付いてたんですね」

「いや…あれだけされれば余程の奴じゃない限り気付くと思つぞ?」

琥珀はこの一日で女性関係の経験値を5000手に入れた

L V U P した

琥珀は女性の気持ちに気付きやすくなつた

「…（今一瞬変なモノローグが頭の中に流れたな） ま、まあ… とりあえず行為を持つてくれるのは嬉しいんだけどさ。俺は節操なしにはなりたくないからね。 ちゃんと気持ちを整理してから付き合うかどうかを決めるようにしたいから」

弓道「クスッ、狼牙さんとは対極的ですね」

「…どうこう意味?」「

弓道「え、琥珀さん知らないんですか？ 狼牙さんって、もう咲苗さんと瑞貴ちゃんに手を出してるって噂が学園で広まってるんですね?」

「……」

え、えっと…確かに久那岐さんも狼牙の女って言つてたよね? といつ」とは…もう三又?

節操無さ過ぎない、狼牙…

「…とりあえず俺は俺のペースでやらせてもらおう

そつ静かに心に誓つた琥珀なのであつた

食事の用意を完全に終えた頃、扇奈、剣道、きなこ、なななの四人はようやく戻ってきたただし…

「…おいら、その荷物は何だ？」

扇奈「今は氣にしないでください」

それよりもお腹すきましたね

剣道「お、もう用意できてるじやん」

きなこ「早く食べましょ」

「…もう句言つても無駄な氣がするからやつたと食べて寝よう、う

ん

だが…

これで終わりなんて安易な夜を扇奈達が許してくれるわけなかつた…

琥珀にとっての長い夜

食事を始めてから30分後、ようやく皆食べ終え、今は扇奈とななが片付けを担当することになった

琥珀と弓道、剣道ときなこはそれぞれ部屋で満腹気分を味わっていた

弓道「けふつ……うう、少し食べ過ぎてしまいました」

剣道「仕方ないんじゃないか？ 琥珀の作る料理は激ウマだしね」「きなこ」「ふう……お腹がこなれてくるまで時間がかかりそうですね～」

「……（シャツ）……ふむ」

ガールズトークリングを楽しむ三人に対し、琥珀は闘京の情報を整理

しているところだった

これからは更なる勢力拡大を目指すのだから情報というのが多くて良い物なのだ

とりあえず断片的ではあるが最低限の情報は入ってきたのでそれを頼りに琥珀は情報をまとめ上げた

因みに…情報源は秘密

琥珀の情報源は通常の情報収集法とは根底から異なる為、出来る限り他者にばれたくないのだ

「とりあえず…分かつてるのはこの闘京はPanzer Group e Gynjou…通称、PGGの支配下にある地域だ。ここで闘京の制圧に遅れてしまった場合、PGGの戦車に攻め込まれるな

ここも時間の問題となりそのため、情報は命と同等の価値がある
といふことを再認識する
慎重かつ、重要な情報は出来るだけ迅速に手に入れて行かなければ
ならない

闘京の主な学園は戦争寺学園とフ50学園

戦争寺の方の番長は金剛丸三蔵、通称は【鉄壁の金剛】
何でも兼任で応援団長もやつてゐらしい
戦闘力もさることながら他の学生から高い評価を得ている
・狼牙、もしくは琥珀でないと対応できぬ存在

その下には金剛丸彩

番長である三蔵の妹だ

通称【鉄血の金剛丸】

こちらもそれなりの戦闘力を持っているそうだが…

恐らく、扇奈、剣道、久那岐、絵梨花辺りでも対応は可能である
琥珀はそうふんだ

他の有力な配下として、堀田大吾、加倉井潤などの存在がある
学生は基本的に己の鍛え上げられた身体と弓や木刀などで戦つてく
るやうだ

一方で、750学園の方の番長…といつべきだらうか

この学園は暴走族【獄煉】が支配しており、そのヘッドが韋駄川煉

こちらもかなりの戦闘能力を保持しているそだ

加えて、こちらは近々PGGからの脱退を表明する動きを見せていくとか…

韋駄川煉の目的は…狼牙と同じ全国制覇

こちらも狼牙、もしくは琥珀でないと対応は難しいとされる

配下として飛谷摩利夫と崎村竜一

こちらの学生はバイクに乗つた学生が襲いかかってくゐやうだ

「ふむ…」

情報を整理したところから、学生の質や総数はほぼ同じ
だが一般の学生の戦闘力…といつより実質的に戦える生徒の総数は
おそらく

750学園→戦争寺→聖城

聖城の生徒はつっここの前までアギトへの恐怖によつて支配されてい
た故に、戦える生徒は極端に少ない
いや、数える方が多いと言つたところだらう

今、急ピッチで鍛え上げてはいるが…間に合つ訳はないだらう
出来るのは事後処理と言つた所だ

その上、750学園の方はバイクを使用していくるといふことで、いらぬ恐怖を与えてしまうかもしないといふ可能性があった

だが、一つだけこちらに勝機がある
それは…指揮が出来、自らも戦えるといつ学生が他の学園よりも多いということだ

狼牙と琥珀を筆頭に咲苗、豪（戦力外）、絵梨花、剣道、弓道、無頼は指揮が出来る

扇奈はまだ未知数なのでカウントに入れないと、戦闘力に関しては信頼してもよいと言えた

戦闘力としてカウントできる面々は、久那岐、兵太、有紀、瑞貴、きなこ、ショーコ、サキ、伊集院玉利、フランシーヌは戦闘やその他の補助などに向いている為、前線にも出て来れるだけの力をしてる

つまりは戦うという経験の薄さをいうなれば力のある生徒の数で補い、一般的の生徒の気を盛り上げようといふことだ
そのためには…

「…どちらでもいいから有力な能力者を捕えて士気を上げるか」

難しいことだな
敵が前線に出張つてくる可能性も低いだろ？
…兎に角もつと情報がいるな

扇奈「終わりました あれ？ 琥珀さん、何をやつてるんですか？」

「ああ、御苦労さま。いや何、集め終わった情報を纏め上げてるんだよ」

テーブルの上にはいくつものノートが積み重なっていた
それぞれの表紙には様々なタイトルやナンバーが書かれている
どうやら一冊では収まり切らなかつた物もあるようだ

剣道「うわ、これは凄いねえ」

きなこ「【聖城学園生徒用トレー二ング方法】、【PGGについての考察】、【有能なB能力者情報】、【未だ変わらぬ情報】、
ななな「」、こっちには【悪い噂を持つ敵】、【謎】…謎？ なんですかこれ？」

「ああ、それはいくら調べても分からなかつたことを書き留めたんだよ」

扇奈「うわわ、これはこの学園の生徒の戦闘力をまとめた物ですか？ こんな物書いて誰かに盗まれたりしたら大変じゃないですか？」
「大丈夫、これらは俺しか知らない隠し場所に隠してあるし…ある程度ここに書かれてる情報は頭の中に残つてるから」

剣道「大層な自信だね？」

「三年間位旅しながら、情報を書き留めてたけど誰にもこれ盗まれたことないしね」

扇奈「……【護国院についての考察】…琥珀さん」

琥珀「…多分、扇奈の知りたい情報はまだ掴めてないよ。でも安心して、全国進出する準備が整えばそれも可能になるから。だから約束して欲しい、絶対に一人で護国院に向かわないうつて」

扇奈「…どうしてですか？」

「扇奈は恐らく誰かに追われてた。無数の刀傷や火傷はその証拠だ。故にそちらに戻れば再び襲撃を受ける。最悪、今度は死ぬことになるかも知れないってことだよ」

扇奈「あ…」

「後は…可能性は低いかもしれないけど、誰かが扇奈をおびき出そうとしたりする可能性も否定できないね」

きなこ「はわ~、どうしてですか？」

「…扇奈の傷、どれも急所を外していたからだよ。綺麗なくらいにね。だから、そのおつていた連中にとって扇奈は殺してはならない、捕まえるべき存在だということなんじやないかなって…」

ななな「す、凄いです…」

弓道「琥珀さん、全国制覇し終えたら探偵か刑事になつた方がいいのでは？」

「あはは、俺はそのつもりはないよ。とりあえず世界を旅してまわつてみよつと思ってる」

扇奈「世界…ですか？」

「うん、俺は旅することが好きになつてから、もっと色々な場所を見て回りたい。そう思つてきてね、だから日本すべてを回り終えたら今度は世界を見て回りたいってね」

扇奈「素敵な夢ですね……分かりました、琥珀さん。私は絶対に一人で行動はしない様に気をつけます」

「ああ、約束してくれ」

後にこの約束が大きく影響してくるのだが…
そのことを今は誰も気が付かなかつた

扇奈「それはそうと…琥珀さん、眞さんでゲームをやりませんか?」「ゲーム? 別にかまわないけど…何をするんだ?」

扇奈「そうですね…とりあえずその「」とを他の眞さんに聞いたら色々と借りる「」ことが出来たんですけど」

「…わざわざ部屋から出て行つたのはそのためなの?」

扇奈「それもあるということです」

「…じゃあ手始めにジョンガでもやるか?」

きなこ「ん、ただゲームをやるだけと言うのも面白みに欠けますし、どうせなら眞ゲーム要素も加えましょう~」

剣道「お、いいね。じゃあ、眞をかいだ紙を各自5枚用意して負けたらそれを引くって言うのはどうだい?」

ななな「いや、怖いですけど…眞さんがそれでいいのなら私はいいです」

「…凄く嫌な予感がするけど、まあいいよ」

弓道「同感です…」

81

静かに始まりを告げた琥珀、扇奈、剣道、弓道、ななな、きなこのゲーム大会

一回戦目は先程言つた通りジョンガになつた

口にしただけあって、琥珀は異常にくらい上手かつた

本気でギリギリのところからばかり抜き出し、上に乗せていつたため後半組はハラハラドキドキしめるを得ずについた

そして…

ななな「あつ…」

ガチャガチャガチャ…

崩してしまったのはななとなつた

扇奈「とこいつ訳で」

剣道「ななな、罰ゲーム。さあ引いて引いて

ななな「うう…あ、あまり厳しくない罰ゲームありますよつ…

（ボソボソ）

口道「どうでした？」

ななな「…【だ、男性を誘惑しろ】でした」

「誰だ…？ これ書いたの…！ 男性って俺しかいないだろ…！」

何この限定的な罰は…！」

罰と叫びつつも嫌がらせみたいな感じになつてゐるね

きなこ「え…、そうですか。グリモアちやんもこれでいひつて言つていたのです~」

「…その似非妖怪貸せ。綿抜いて魂引きすり出した後、燃やし尽くしてやる

剣道「そんなことよりも…」

扇奈「罰ゲーム執行です

ななな「え、ええと…でででもどうすれば…」

扇奈「（ボソボソ）

ななな「え、ええええええええー—————？ むむむむむり
でしゅよ—————」

扇奈「…ですがここで琥珀さんにアピールしておかないと…」 小声
ななな「う、ううううう…わ、分かりました。や、やります—————」

なんだか凄く思い悩んでいたなななだが扇奈の誘導（？）によ
つて決心したようだつた
その光景を見て琥珀は凄く嫌な予感しかしなかつた

パラツ…

何を思ったのかなながいきなり服をはだけ始めつて—————？

「何やつてんの！？」

ななな「ば、罰ゲームです」

「ストリップショージゃないんだから————— 脱がなくともいいよ！—————
！ つーか何で脱ぐ—————ハツ！！ 扇奈だな？ 扇奈の発案だな！—————
！」

扇奈「いやですね。何を言つてるんですか、琥珀さん 私は唯二
んな誘惑のし方はどうかと言つただけですよ」

「嘘だ—————」

剣道「そういづつててるつちこなななはもう準備終わつてるよ
「ハツ！？ いつの間に…」

琥珀はふと何気なくななのいた方を向いてしまつた

ななな「え、えと……」半脱ぎの下着のみ着用
「ブツ！？」 ちゃつかり見た後、全力で目を逸らす
ななな「あ、あの……琥珀さん……」

「な、なんだ！？」

ななな「そ、その……」

「……ふ、服着てくれ…… 話はそれから聞くから……」

ななな「ははい……！」

余程恥ずかしかったのか、なななは直ぐに脱いだ服を着直した

その間、琥珀は顔を真っ赤にしながらもそちらをずっと見ずに天井
をずっと見つめて精神集中し、先程の光景を頭の中から削除するこ
とに必死になつていた

扇奈「あ～、駄目ですよ～」

剣道「そうそう、罰ゲームなんだから」

「……もう十分だから、お願ひだからこれ以上は……」

剣道「お、お姉ちゃん流石にこれは……」

扇奈「仕方ないですね～、じゃあ次に行きますか～」

「え、……」

きなこ「罰ゲームは？」

剣道「勿論有りで」

「……拒否権は？」

剣道＆扇奈「「ない（あつません）」」「

「デスヨネー」

そして再びゲーム再開…

それから6人はポーカー、神経衰弱、爺抜き、UNO、人生ゲームなどで遊び、それに負けた者は過酷としか言こよびのない罰を受け羽目になつた

扇奈「ふ、で、では…次のゲームで最後にしませんかニヤン」

京堂扇奈

受けた罰…バーニガールの服着用&ウサ!!!付も、語尾に【ニヤン】をつけてしまふこと

剣道「や、賛成だよん」

中西剣道

受けた罰…マイクロビキニ&Hプロン着用、語尾に【よん】をつけ

て喋る

弓道「うう…な、なんでこいつは…アホ！」

中西弓道

受けた罰…体操服&ヘソ出しハーフ、語尾に【アホ】をつけて

フルマ

喋る

きな」「ほわあ～、確かにこれは色々と来ますね～なの～」

月読みなこ

の、】受けた墨の匂の不気力と背中にはついた墨の匂いが、脇腹に【な

根岸ななな

受けた罰…もはや紐としか言えない水着、語尾に【わっしょい】

「…何というか、自爆としか言いようがないな。って言つた誰がこんな罰を考えたんだよ」

土御門琥珀、ほぼ常勝無敗のため罰ゲームなしの状態

になつていたため、琥珀は一度もビリになつていなかつた
そればかりか一番悪い成績でも3位と言つもはやゲームを支配して
いる状態と言いきれるほどの戦績だつた

扇奈「ひひひ～、琥珀さん強過ぎます～」ヤン「

剣道「…どのジャンルのゲームも琥珀の独壇場だったような気がするよん」

きなこ「ほわ～、ですがグリモアちゃんも言つていきましたが琥珀さんはズルやイカサマは一切やつてませんですよ～なの～」

弓道「で、でもいくらなんでも不公平ですよ～！……どすこい／＼／＼。何で私達だけ罰受けて琥珀さんは一度も受けてないんですか／＼…どすこい…」

ななな「」、琥珀さん。ゲーム強かつたんですね…わ、わっしょい／＼／＼

「まあ、日本中回る際に裏賭博の出入りもしてたこともあつたからね。賭け」ととかでやるゲームはかなり強いつもりだよ」

剣道「あ、だから人生ゲームは3位だったのかよん」

「まあそういうこと。俺が得意なのはポーカーとか麻雀だからね」

どんな旅生活送つてたんだよ…

ななな「もしかして…琥珀さんつて結構お金持ちなんですか？…わ、わっしょい」

「ん、一応銀行には十万B.P.程入つてゐるけど？」

剣道「じゅ、十万！？…あ、よん」

「まあ、一応それは口座の一つだから、全部合計したら結構な額になるかな？」

きなこ「ふええ～、やつぱりお金持だったんですね～なの～」

「それほどでもないとと思うが… それにその半分は兄さんから受け取つた物だし」

扇奈「お兄さんですか～ヤン?」

「ああ、俺の兄、土御門翡翠。何でも貯金が趣味だったみたいで、渡された時何か驚いたよ」

弓道「い、一体いくら入つっていたんですか?… ジュ～」

「ん、大体100万BPかな?」

ななな「ひ、100ま!?」

「ん、でもそれ貰つた後も殆ど使ってなかつたから、溜まりに溜まつてゐつてわけ」

剣道「いいな～、私なんて用々どいつもかつてやりくつしよつが悩んでるのによん」

「? 用々、皆はどれくらいでやりくつしてゐるの?」

弓道「皆、大体30～50BP辺りみたいで。生活費とかは外してますけど、それが皆の平均的な小遣いなんですよ～」

「ふ～ん… ジヤあさ、今度俺の奢りで買い物に行くか?」

扇奈「え…」

「扇奈もあらかた必要な物もあるだろつし… 洗剤とかシャンプーとかの日常用品とかね」

扇奈「あ、でもその分はもう咲苗さんから十分な額を頂いてます～ヤン」

「服どかも必要だろ? 今はそんなに替えもないだろうしね」

扇奈「あう… 反論できません～ヤン」

「幸いなことに俺は殆ど金使わないし、使わないだけで貯金してゐつて言つるのは勿体ないからね。世の中はお金を使つたほうが経済が良くなるつて言つジンクス(?)もあるし」

剣道「えつと… なら甘えてもいいかなよん?」

「ああ、でもそんなに大勢の分は無理かな? だから～の事は出来るだけ口外しないでくれよ?」

ななな「も、勿論です！――― あ、ビ、ビすここ」

「ん。で、最後のゲームはどうするの？」

「きなこ」「もう夜も遅いですし……じゃんけんでどうですか～？なの～」

「俺はいいけど、監は？」

「――― 異論なし（です）」―――「

「じゃあ行くぞ？……ジャンケン！―――」

ポン

琥珀……グー

扇奈……パー

弓道……グー

剣道……パー

きなこ……パー

ななな……パー

弓道「えっと……残りは私と琥珀さんみたいですね。どすこい」

「うわ……まさか初手で大勢が決まるとは油断したな」

弓道「じ、じゃあ行きますね？どすこい」

「ああ」

じゃんけん……ポン……

琥珀 グー

弓道 パー

「……え」

弓道「えっと……すいません。勝っちゃいました、ごめんなさい」

「……くつ、最後の最後で罰を受ける羽田になるとせ……」

扇奈「では引いてくださいニヤン」

ガサゴソ

パツ

琥珀は一切迷わず一番最初に手に触れた紙を取り出し、広げてみた

そこには……

【本日、一人誰かと一緒に寝る】

「……」

剣道「? 琥珀、何を引いたんだい?」

因みに現在は罰が終わつた扱いになつた為、語尾に余計な言葉をつ
けなくともいいよになつた

だがそんなことはどうでもいい

琥珀にとつての問題はこの罰ゲームであつた

「…………」完全に固まつている

扇奈「えつと…あらあら」

剣道「何々…へえ

「し、しまつ…」

気付いた時には既に時遅し…

女性メンバー5人の中で最も行動力のある剣道と扇奈に罰の内容を見られてしまつた

「〇丁〇」

土御門琥珀、一生の不覚…

扇奈「それで」
きなこ「琥珀さんは」
ななな「だ、誰を…」
剣道「選ぶんだい？」

「…（や、『』ちゃん！？ た、助けて…）」 弓道にアイコンタクト

弓道「（む、無理です…）」

何とか脱出ルートを探してみるも既に四方を固められている状態だつたが故…

逃げ場なし

「『』、『』が俺の終着地点か？」

落ち着け、落ち着くんだ

こ、こんな時は素数を数えるんだ

素数は2では割り切れない数… それは私を元気にさせて… くれるわけねえ——だろ！！！

く、どうすればいい…

そ、そうだ

こんな時は兄さんの教えを思い出せばいいんだ

えっと、確か兄さんは女性に対する扱い方つて言つ講座を開いてもらつたっけ
で、その時確か…

翡翠「琥珀よ、男とは女を守る存在である。故に男は強くあらねばならない」

「はい、兄さん」

翡翠「そして、闇でも男は強くなければならない」

「……は？」

翡翠「故に今日からお前には耐久訓練を用意した！！ 体にある力を一点に溜める力！ それを活用するのだ！！！」

「ひ、昼間から大声で何卑猥なこと言つてるんだ――――――！」

バキッ！！

翡翠「ぐはつ……ふ、」、琥珀よ……良い拳だ……ガクッ

「…………」
ま、まともな事教えてもらつてね――――ッ――！

「くつ……」

扇奈「選んでもらえないのでしたら全員と一緒に寝てもらいますよ

「――」

「ブツ！？ ハ、破廉恥過ぎるわ――！ もう少し女の子なら恥じら

いを持ちなさい……」

剣道「じゃあ選んでよ」

「…………《琥珀、心中で葛藤中》くくじでお願いします」

ヘタレともこえの回答となつて結局琥珀の作ったくじを引いて決めることとなつた

結果……

きな」&扇奈「~~~~~」

剣道「くつ……」

ななな「あう……」

弓道「ホツ……」

琥珀は扇奈ときな」と寝ることにして

「今日は……眠れないだうつな」

琥珀ことひでの長い夜（後書き）

この後、狼牙は久那岐ルートで琥珀は扇奈ルートで行く予定なので
すが…

煉と京子さんはどうすべきか悩んでます
蓮も京子さんも結構好きなキャラなんですね…
あ～、早くPGGとの戦いを書きたい
書きやすそうなので

琥珀の休日

チュンチュン…

朝日がカーテンの隙間から差し込むのが目に染みた
何故か?
簡単だよ

一睡も出来なかつたからだよ……!

寝れるわけないよ……!

だつて扇奈ときなこ、俺に抱きつきながら寝息を耳に吹きかけてき
たり、悩ましげな声を囁いたりして来るんだよ！？
もう狼牙じやないけど狼になつても普通おかしくないからね！…？

だから…一晩中、昔教わつた封印術の術式とか悪靈退散の術式とか
ずっと頭の中で復唱してたよ

眠くて眠くてしうがないけど…まあ皆を襲わなかつたからよしと
しそう

今現在もきなこと扇奈の一人に抱きつかれて起き上がる」とすりで
きないでいる琥珀

現実逃避中…

皆が起きてくれたのはそれから約2時間後だつた

111

全く寝ていなかつたため、琥珀は完全に目元にはくまが出来ていて顔もやつれていた

一方で扇奈ときなこはまるで剥いたばかりのプリップリの茹で卵のような肌具合で満面の笑顔を浮かべていた

琥珀はかなり眠かったのだが、とりあえずその眠気を誤魔化す為に珈琲を砂糖なしで飲むことにした

普段は紅茶なのだが、今日は致し方なしと言つた所なのだろう

「（ウクツ）嘘つ！？ ちょっと多かったなあ」

「モグモグ…いや〜、琥珀さんの料理は本当に美味しいですね」

「そうですね、ついついお代わりしたくなります」

琥珀はもういつでも御嬢に行けるな

「…今日は突っ込まないんですね、琥珀さん」

琥珀が全く突っ込まずに剣道の冗談を肯定したため、琥珀に好意を持っている4人は驚きを隠せずにいた。唯一、友人や恩人と言った感情を琥珀に対して持っている弓ちゃんが気になつたのか琥珀に聞いてきた。

「…俺はもう土御門家を感動されたも同然だからな。父上からは度々どうやつてからは知らないけど手紙が来て帰つて来いつて言わてるんだけどさ。俺は…化け物扱いされているからね、本家でさ」「ば、化け物つて…」

「仕方ないんだよ。俺の実家は元々陰陽師や呪術師何かをやつている特殊な家柄なんだけどね、俺はその歴史の中でもトップ5に入る位の実力の持ち主つて言われてた上にB能力に目覚めたからね。それに…一度、能力が暴走して本家で大暴れしたことがあつたんだよ。そのせいだ…ね」

「……」

意外としか言いようがなかつた

あれだけ優しくて強い琥珀が実家に帰ることが出来ず、父親以外の親族に腫れもの扱いされているという事実に…

5人はそれ以降何も言つことが出来なかつた

「…つと、そんなことは置いておいて。今日はどうする?」

「え?」

「とりあえず学園の方を制圧し終えたところだから、そろそろ鬪京制圧に動くだろ? でもどう動くかはまだ決めかねてるだろ? からさ」

「どうしてですか？」

「ん、実は獄煉がPGGの離脱を表明する気配ありつて言つ情報が入つてゐるんだ。だから動くのはそれからでも遅くないかなって思つてるんだよ。一応、この件は狼牙と豪さんの一人と相談して決めることだけだ」

「そりなんですか～、でも本当に琥珀さんの情報網は凄いですね～。もしかして…琥珀さんつてB能力以外に何か特殊な力を使って情報を集めてるんですか？」

「（ギクッ）え、えつと…ま、まあかなり有能な情報屋が居るんだよ」

「…………（ジ～～）」

「…………や、やあ…～…朝食食べ終えたら早速狼牙と豪さんのところに行こ～うか…～…そりこよひつ…～…」

「…………あ、逃げた」

琥珀はその場を無理矢理やり過ごした後、急ぎ足で狼牙と豪のところに向かつた

まずは豪の部屋を訪れて、それから他の生徒に狼牙のことを呼んでもらおうと琥珀は考えていた

「ン」

「失礼します、豪さん。いらっしゃいますか？」

「ああ、その声は琥珀君だね。入つてくれ」

「はい」

琥珀は言われたとおり、部屋に入りそのまま椅子に座つて一息ついた

「大分疲れているようだね」

「…分かりますか?」

「昨日はお楽しみだつたのかい?」

「…いえ、というか俺の性格上それは無理だというのが分かりますよね?」

「ハハハ、そうだったね。じゃあどうしたんだい?」

琥珀は昨日あつた出来事を伝えた

すると、豪は何やら面白いものを見つけたような顔をし始めた

「ふふふ、君は本当に狼牙とは正反対の性格なんだね」

「…といつと?」

「昨日はあいつは咲苗さんと久那岐の一人とお楽しみだつたからだ

よ」

「久那岐さんは分かるけど…咲苗さん今までか…」

本当にあいつつて手出すの早いんだな

…まあそこは個人の自由か

「それで…今日俺の部屋に来たのは何の用があつてなのかな?」
「あ、そうでしたね。今後のことを考えようと思つて」

「ふむ、ならさつせと決めてしまおう」

「…え、狼牙は？」

「今日は昼まで起きんだろう。さつまきまで咲苗さんと久那岐の一人
とにちゃんとやんしてたんだからな」

「……」

「まあそんな」とは置いておくとして…琥珀君、君の意見を聞こう
か

「そうですね、まず俺としては煉獄をこちらに寄せ付けないようにな
しつつ、戦争寺を無力化していくことをお勧めします」

「どうしてだい？」

「ハツキリ言いますと、獄煉と戦争寺を比べた場合、獄煉は機動力、
そして戦争寺は質量と一人一人の戦闘力の高さが売りです。だから
長期戦になった場合、残しておいてこちらが不利になるのは戦争寺
の方だと思ってます。幹部の数も戦争寺の方が多いですからね。加
えて、あまり悠長にこの一校を抑えるのに時間を費やしている暇は
ないです。最低でも1か月から2か月の間にはどちらかを落とし、
そして落としていないもう一方の方を直ぐにでも落とせるくらいに
はしておきたいです」

「…だがそのためには資金がないぞ? その面はどうするんだい?」

「あ、それなら心配ないですよ」

「え?」

「兄さんが残してくれた資金と俺の個人資金がかなりありますから。
鬪京を制圧するのには…多分、5000BP有れば大丈夫ですよね
? 引き抜きとかしたいのなら幾らか足しますけど?」

「…本当に君がいてくれて助かつたよ」

こうして狼牙軍団は最初に戦争寺を攻めながら煉獄を無力化して戦力を地道に削っていくという案に出た

「さて、資金の方は後でこちらに持つてきますね」

「ああ、いずれそれは弟に返させよ!」

「ハハ、まあやつたりと待つてますよ」

「さて、今日は仕事は私達がやっておく。だから琥珀君は少し外に出てきたらどうだい?」

「…そうですね、ちょいと扇奈の服を買つてあげると約束してましたし」

「そうか、序にいくらか買い物を頼まれてくれないかな?」

「ええ、良いんですけど。請求書は?」

「勿論貰つてきてくれ。後でその分のお金は返すよ」

「分かりました、じゃあとりあえず今日外に行くのは俺と扇奈、剣道、ななな、きなこ、後は弓矢やんです」

「ん、承つたよ」

琥珀はそのまま部屋を出ていき、自室に戻つていった

そして今日は皆で買い物に行くことが決定したことを伝えると、部屋に居た女性たち全員が急いで服を着替えるために自室に戻つた

琥珀はそれまでの間、今自分の手持ちのBPと必要な荷物の確認、そして一応今日のコースなどを見て時間を潰していた

ほんの少しして、扇奈達が琥珀の部屋に戻ってきたため、全員で買い物に出た

まず最初に行く場所は豪に頼まれたものを買いに行く場所
たんたん店である

「琥珀さん、いらっしゃって」

「ちょっと店のために特殊なアイテムを購入する」としたんだよ

「へえ…こんなところ、始めてきたよ」

「すいません」

「あ～、はいはい」

琥珀がお店の人を呼び、店の奥から店員たちが出てきた

「いらっしゃいませ」

「えつと、【不思議犬】、【シルバーリング】、【ぽわわ銃】、【ソノシート】、【素早い変な昆虫】、【便所掃除セット】…これくらいですかね。これらを50個ずつ頂けますか？」

「50…? お、お客さん…お金は？」

「んつと…これで良いかな（ちやりん）」

「じゅ、十分です…!…ま、毎度ありがとうございます…ではお

「まけに」の【伝説の「ロロッケパン】をどうぞ……

「すいません、これを郵送って出来ますか？」

「あ、はい！ では住所を……」

「聖城学園にお願いします」

「はい、またのお越しをお待ちしております……」

「さて、これで買い物終わりと……ってどうしたの皆？」

今まで琥珀の後ろに居た扇奈達が目を丸くしていた

「……琥珀さん、全部豪さんが頼んだんですか？」

「ううん、これは俺個人の買い物。今回は俺の持つてたBPで足りる分だけ買つたんだけどね」

「……本当に琥珀さんってお金持ちですね」

「特に使う時間も買いたいものもなかったから貯まってただけだよ。それよりも今から銀行に行つてお金卸してから貯で買い物の続きを行こうか」

「あ、はい」

それから琥珀達はアパートやら某・量産店やら様々な場所を見て回り、買い物を楽しんだ

その際に不良と思しき連中に絡まれたのだが……

「…………」「頭が地面に埋まっている

「地上版、リアル犬神家」

「うわ、これは幾らなんでも同情しちゃいますね」

「あはは、でもこいつらも相手を間違えたってことだね。ナイフ持つて脅してきたし」

「で、でも琥珀さん

「でも琥珀さん。慣れてるんですね、じうじつた」ことに、

「藍か瓜川か」た連中は縋んでくるからね。加えて今回には扇祭
達もいるからなのかな。可愛い子たちと一緒に買い物してるのがこ
いつらの気に食わなかつたんだろうな」

ええへへへへへへ

か、可愛いって//

「まあ」こいつらのことは放つておけ、それよりも買い物も終わつたし後は何処かで何か食べて帰るが、

「」「」「」「」「」

こうして琥珀達は休日を楽しんだ

その光景を物陰で見て いる人物がいた……

」
「

勿論、琥珀はその気配に気づいていたのだが

「（…今の、忍びだな。護国院の偵察部隊つてどこのか？ 今日、扇奈が俺たちと一緒に居ることがばれたな…暫く、扇奈の周りを警戒しておこう。）」

「琥珀さん？ どうかしたんですね？」

「いや、何でもないよ扇奈」

護国院

「……以上が我が忍者部隊の偵察結果です」

「…そうですか、あの子は今鬪京に…」苦勞様です、下がつてよろしい

「ハツ…」

そういうふうに忍びの部屋から退出していくつた

「…義経、どう思いますか？」
「…暫くは手を出さない方がいいと思つ。よつこもよつてあの土御門琥珀のいる聖城学園に身を寄せたなんて…懲々虎の口の中に入つて食べられに行くようなものだと思つよ」
「…弁慶はどう思ひますか？」
「…オレハ、ヨシシソノイケンニ…サンセイダ

「私も同意見だ。何せあの【レッドドラゴン】はかつて護国院内部に入り込み、我らの内部情報を盗み取り、学生184名を気絶させ難なく脱出したほどの実力者。恐らく、何の策も無しに闘京に向かつて行けば手痛い攻撃を受けること間違いなしだろう」「では暫くの間は様子見をしましょ！」

こんな会話が繰り広げられていた

因みに各地域での琥珀の評価と風評はそれぞれ異なっている
ある地域では血も涙もない狂人

とある地域では優しき季節外れのサンタクロース

又とある地域では何故かキノコ狩りを堪能していた裕福な人

などなど…

場所によつて様々な風評を得ていた

因みに護国院での評価は…

絶対に手を出してはいけない破壊神

と呼ばれている

「ただいま」
「おう、今戻ったのか？」
「……狼牙、今起きたの？ もう17時だよ？」
「いや、15時には起きてたぞ？」
「…………ハア～～～」
「な、何だよ」
「狼牙、ハッスルするのは良いけど学園の番長って言つて自覚持つて
ね？」
「あ、ああ」
「まあそれはそれとして…狼牙、小包届いてないかな？」
「え～っと…委員長？」
「着てるわよ、少し前に届けに来たみたいね」
「それ、豪さんに頼まれて買つてきた品だから豪さんに渡しに行か
ないといけないんだよ」
「何を買つてきたんだ？」
「今後の全国制覇に必要になつてくる品物。あ、これは狼牙に渡し
ておくね」
「あん？ 何だこれ？」
「ネコル金貨、持つてただけで金運が上がるつていうやつだよ。狼
牙、今金欠でしょ？ 少しでも運が向いてくるよつて思つてね」
「おお、ありがとな」

「咲苗さんにはソノシート、攻撃の命中率を上げるアイテムだよ」

「あ、ありがとう。でもいいの？」

「どの道、殆どの人に渡す予定だつたからね。次に兵太。攻撃力が低いのが難点だけどそれ以上に回避行動が苦手なのが難点だから素早い変な昆虫、これは持つだけで少し体が軽くなる効果があるから有効に使つてよ」

「お、おうー。ありがとうございますーー！」

琥珀は次々と購入してきたアイテムを渡していくた

渡したアイテムとその相手のリスト

- | | |
|-------|---------|
| 斬真狼牙 | ネコル金貨 |
| 日比生咲苗 | ソノシート |
| 天狼久那岐 | ぽわわ銃 |
| 陣内兵太 | 素早い変な昆虫 |
| 成瀬有紀 | ぽわわ銃 |
| 中西剣道 | シルバーリング |
| 中西弓道 | ぽわわ銃 |
| 宮里絵梨花 | ぽわわ銃 |
| ショーコ | 不思議犬 |
| サキ | ソノシート |
| 月読みなこ | シルバーリング |
| 山本無頼 | 素早い変な昆虫 |
| 伊集院玉利 | 不思議犬 |

フランシーヌ山吹 不思議犬

堂本瑞貴 ぽわわ銃

根岸ななな シルバー・リング

斬真豪 ネコル金貨

京堂扇奈 シルバー・リング

大体こんな感じになつた

やはり主力となる狼牙たちは攻撃力や回避行動能力を高めるという効果のあるアイテムを選んだ
だが…

「何で扇奈、剣道、ななな、きなこはシルバー・リングなの？」

「それは」

「秘密なのですよ」

「へへへ」

「え、えへへ」

何故か機嫌が良い4人なのであつた

周りに居た人間は誰しも理解したのだが…

唯一、琥珀だけはそのことを全く理解していないのだった

「所で琥珀はどのアイテムを持つてるんだ？」

「あ、俺はこれ

そう言つて懐から出したのは【身軽の羽D×】

「これ……どういう効果があるの？」

「簡単に言つと身体が身軽になる。俺は足技とか素早さがネックの戦闘スタイルだから」

「これ、どこで手に入るの？」

「秋波原にあるてんてん本店で手に入るよ。俺は旅してたから手に入れられたんだよ」

それから琥珀はアイテム配布を咲苗を主に任せ、自身は豪の元に向かつた

コンコン…

「失礼します、豪さん」

「お、帰ってきたね。で、注文の品はどうだった？」

「とりあえず最新のパソコンと豪さんの希望していた情報屋のこととかは何とか目処がたちました。でも俺もいるのに情報屋なんて要りますか？」

「念のためだよ、それに君の持つてる情報だつてすべてが完璧に正しいわけではないだろ?」

「…まあそうですね」

「じゃあ請求書貰えるかな?」

「あ、はい。これですね」

「…ふむ、かなり安く済んだようだね」

「まあ交渉しましたから」

「琥珀君に任せせておいて正解だったね。ありがとうございます」

「いえ、では俺はこれで」

「…」ついして幾分か騒がしい琥珀の休日は終わりを告げた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7332m/>

大番長～白き狼と紅き龍～

2010年11月6日20時23分発行